
英雄の伽《とき》

火和良

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

英雄の伽とぎ

【Nコード】

N5078I

【作者名】

火和良

【あらすじ】

「なにが正しくて、何が間違っているのか？」

とある二つの国の闘いが、終わった。

ミストルテインという「戦争が産む石」を使う代償に、

昨日の記憶さえも失っている青年エイルと、

戦争に負け、すべてを失った少年。

ふたりはそれぞれの故郷で、「英雄」と呼ばれる存在だった。

少年は処刑されることとなり、

処刑台までの護送には、勝戦国の英雄、エイルが任命された。
その道中でエイルは少年の生きた国の姿と、さまざまな出会いと友
情を経験していくが、少年と心を通わせた記憶さえも、徐々に失っ
ていく

これは、

ある英雄がこの世を去るまでの、話。

序章

気持ちいい。

僕は そう思った。

四方上下を石壁に囲まれ、何の灯りも無い空間。

音もなく、風の流れもなく、自分の目が開いているのか、閉じているのか、

どちらにしても大して変わらないほどの暗闇のなか、

おそらく、時間だけが流れている。

何も拠り所のない、たぶんこの空間の真ん中に、僕は座っている。のばせるだけ伸ばした右手に、ひやりとした石壁が触れた。

結露した水が指のあいだを這って、滴る感触。かじかんで、軋んでいく関節。

濡れた手を口元に運び、口に含む。

自分の体温とはちがう、遥かに冷たいものが喉元を通っていく。

僕に備わる五感のうち

いまや 触覚だけが

僕が今 生きていることを確認させてくれる。

僕は

この空間が好きだ。

世界で一番、美しくて華やかな場所よりも

この ただ終身刑を待つ独房の中が世界で一番好きだ。

僕は、ふと首をもたげた。

地唸りのような音が、聞こえる。

不意に、闇の中に、白いひとすじの縦線が浮かび出た。

あれは。

この独房にはとんと、縁もゆかりも無かったもの。

そうか。あまりに遠のいていて、呼び名さえ霞んでいた。光。

こじ開けられていく岩戸から射す白に、思わず顔を背ける。

くらむ視界のなか、

深緑の血管がういている、骨と皮しかない青ざめた手が

黒い石畳に根をはったように広げられているのが見えた。

気持ち悪い手。

不気味な手に釘付けになると、腕を強く引っ張られた。

僕は軽々と石畳から引き剥がされ

光のただ中に、引きずり出された。

視界が焼かれた。世界が翠か朱か、どちらともつかない色に塗りつぶされる。見えない。

僕は首輪についている鎖を引っ張られ、光の中で千鳥足をふむ。

進んでいるのか、曲がっているのか、登り坂なのか、下っているのか冗談じゃない。意味がわからない。

独房の中に戻りたい。

僕は足を止めた。

つぶれた目で歩くより、止まった方が安全だ。

僕はもう、どこにも用は無いだ。

「歩け」

「独房に戻して下さい」

「歩け」

僕は、鎖を大きく鳴らして、看守の腕を振り払った。

「離せ」

朱か翠が明滅する視界の隙間で、
僕は看守の血走った目をかすめ見る。
瞳孔が開いている。眼球がこぼれおちそうなくらい、見開かれた目。
いまにも僕を
ぐちゃぐちゃに髒り殺しそうな目。
見覚えがある。
何千回 何万回。僕はこういう目を見てきた。
僕は。

「ぐ……っ!？」

両足が宙に浮く。
僕の首輪の鎖を、看守は自分の肩に引っかけて歩き出した。
看守に遠く身長の及ばない僕は、
彼の背に鼻頭を何度もぶつけ、首を引き攀らせ、目を剥き、四肢を
垂れ揺らして、
苦しげに喘いだ。
つぶれた視界は戻りつつあったが
今度はチカチカと白んだ視界のなか、僕は
等間隔に通過する、天井の橙の灯りを見送るばかりだった。

ほら

だから僕は
独房の中の方が好きなんだ。
独房は世界で一番、平和な場所なんだ。

はやく、僕をあゝ場所へ 帰して。

天井の灯りを見送り続けていると、鉄格子の仕切りを通り過ぎたの
が見えた。

僕はこの刑務所で、最も奥まった場所にいたはずだ。

表に連れ出そうとしているのだろうか。
免罪などありえるはずもない。
ではこれは、処刑の時なのか。
僕はとうとう、首輪ごと首を外せるのか。

「殺してくれるんですか」

出し慣れていないせいで、すっかり噎れた声で僕は尋ねた。
看守はふと、踏み出す足を緩めて、答えた。

「まだだ」

足早に歩き出した看守の背に、僕は鼻頭をめり込ませる。
視界が、さらに白んでくる。
まだなのか。

まだ僕は楽になれないのか。
騒がしく眩む視界が、霞んでぼやけていく視界が目障りで
僕は目を伏せる。
頬を 温かい何かが伝う感触が した。

「見せしめ、ですか？」

「そうよ」

朱を基調とした、毒々しい部屋である。
朱の壁。朱のベットシート。橙の艶めかしい灯り。象を5頭いれても
釣りがるほどの天井高と広さ。
その中央に置かれた紅い一人掛けのソファに腰掛けて、
黒い喪服のドレスを着た少女は、伏せがちに呟いた。

少女の前に直立していた深緑の軍服姿の青年は、かすかに眉根をよせる。

青年の胸元には無数の勲章が付けられており、端正な顔の右頬に、古傷の跡が残っている。

青年は躊躇いがちに、だがしっかりと少女を見据えて、呟いた。

「まだ、続けるおつもりで」

「これからよ」

艶やかな唇をちいさく動かし、虚空を睨めつけて、少女は囁く。

「彼が一番、私の部下を殺した。そうでしょう。彼はあの国の英雄だった」

すっと青年を見上げた少女は、翠の目を大きく見開いている。

栗色の髪。白い肌。大きな翠の瞳は長い、青みがかったまつげに彩られている。

瞬きもせず、少女は強張った顔のまま、かくりと小首をかしげた。

「あなただって、私が負けたら同じようなことをされたわ。エイル。あなたは、私の国の英雄。あの国の人間を、一番多く殺した。そうでしょう」

青年 エイルは無言で、腰に下がる剣の柄を握りしめた。

気狂いの人形のように首をもたげた少女を、臆することなく見つめかえす。

「あの少年も首都で、処刑なさるのですね？」

「あの子供こそ、私の民の前で殺す」

エイルの瞳を凝視したまま、少女は立ち上がる。

思わぬ風に押され、体をとどめる依り木を抱き込むように、

少女はふらりとエイルの胸に寄り添って、頭をあげた。

「連れてきて。もうすぐ近くを通るから。彼の護送に付き添って」
愛らしい笑顔。

まるでお菓子をねだる、少女のような。

エイルは無表情で、その笑顔を見下ろした。

瞬きもなく、口の形も寸分変わらぬ、貼り付いた笑顔。

ふとエイルは、口元だけに微笑みを浮かべる。

「仰せの通りに。陛下」

陛下。

そう呼ばれた少女は、満足そうに頷き、一瞬のうちに、笑顔を消し去った。

「7日後までに、首都へ」

エイルの傷のある頬に、小さな白い手が添えられる。

「早く連れてきて。エイル。私の」

言葉は最後まで、残らなかった。

朱が割れる。

空間の端に吸い込まれるように、紅の部屋が掻き消えていく。

散り散りに少女の顔や体が裂け、砕ける。ただ、頬に添えられた手だけがしぶとく残った。

朱の隙間に、落ち窪んだ古いベットや穴の開いた床板が垣間見える。

エイルは少女の首から上が完全に消えた時、

頬に張り付いたままの手をぞんざいに払いのけた。

朱が消えた。

そこは毒々しい部屋ではなく、全長10歩も無い木造の小部屋だった。

軍の宿舎代わりに使われている、廃墟のホテル。その一室である。

天井の薄ら白い灯りが、か弱く揺れている。

エイルは疲れたようにベットに腰をおろし、頬を手の甲で拭う。

古傷を上書きするような、紅い爪痕が浮かんだ、頬を。

序章（後書き）

（11月3日 推敲）

猛獣の扱いの方が、まだ愛されている。

側面の板間から細く、夕陽が射すコンテナの中に足を踏み入れ、
エイルは眉をひそめた。

鎖の擦れる音がする。

コンテナの中央に置かれた、中型犬一頭がなんとか入れるほどの黒
檻の中に、
少年は仰向けになっていた。

首輪の鎖は檻の天をとおり、コンテナの天井の杭に繋がれている。

白い拘束布で、腕ごと一纏めにくるまれている華奢な上半身。

皮と爪がむけ、血の滲む素足は、力なく格子の外へと投げ出されて
いる。

少年はきちきちと鎖を鳴らし、虚ろな紫紺の目を、コンテナの入り
口へ向けた。

幾重もの金の線をゆっくりと踏み超え、エイルは檻の前に立つ。

覇気のない

まるで覇気のない、かつて戦鬼と恐れられたという少年に、

エイルは軍服の片膝について言った。

「アリオン連合軍第一師団所属・第三隊隊長、エイル＝ウエリテリ
セ大尉です」

こちらを見たままぴくりとも動かない少年に、エイルは僅かに身を
かがめ、

声を近づける。

「アリオンの首都まで。私が貴方を、護送す
」
「ゴソウ」

少年は、かすれた声で呟いた。
顔をめぐらせ、天に繋がれた鎖をぼんやりと眺める。

「首は、あげるよ」

檻と光。二重の格子と鎖に縛られ、少年はうわごとのように言った。

「体は置いていって。墓をもう用意してるんだ。」

心臓は、そこに埋めたい」

「出来ません」

きちきち、ち、ち。

鎖を鳴らし、少年はエイルに、顔を向けた。

感情の読めない、ただこちらを凝視する一対の紫紺を見据え、

エイルは厳かに言い切った。

「貴方はアリオンの首都で処刑される。」

遺体は残りません。首も。体も。

心臓も」

「……そう」

少年は再び、暗い天井へ繋がる鎖を見上げた。

「そうか」

エイルは、伏せがちに立ち上がる。

入口からの夕陽を灯していた少年の瞳が、エイルの影に覆われて光を失う。

踵をかえし、エイルはコンテナの入り口へと歩き出す。

開け放たれた扉から見える、薄墨で書いたような山々と、金の平原。
険しい山あいの遙か上で、雲間にかかっている夕日。

溶かし込まれたような、淡い橙の空。灰色と、鮮やかな白雲の隙間
から、

細い金の光が大地へ射している。

レンブラント光線。

別名 天使の梯子。

「天国みたいだろ」

背後からの穏やかな声に、エイルは振り返る。

「夕日だけは、世界で一番、綺麗なんだ」

少年は未だ、コンテナの天井を見つめている。

首輪の鎖が穿たれた、

空も、天国の似姿もない天井を、物柔らかに見つめている。

ふわりと紫紺の目を閉じて

少年は笑った。

「僕は、この国が好きだよ」

息をのむエイル。

少年の横顔を、食い入るように見つめる。

やがて凜と見据えてきた少年に、エイルははじかれたように一瞬、目を逸らした。

「何日後？」

少年の声は、一転して森厳だった。

エイルが目を見張るなか、

鎖を騒がせることなく、ゆっくりと体を起こして、少年は鉄格子に背を預ける。

銀の髪に紫紺の目。いまは痩せ果て、華奢な子供にしか見えないが、1ヶ月前までは戦場のただ中で大勢の兵士を蹴り殺していた

『ヴァルシスの英雄』。

今の今まで、死んだような目をしていたのに。

「処刑は何日後？」

口だけを動かし、射殺すような目で微笑む少年に、

エイルはすっと 目を据わらせた。

「7日後だ」

少年に背を向け、世にも美しい世界に向かって、エイルは呟く。

「短い付き合いだが。」

君のことは、何と呼べばいい？」

「どうにでも、好きなように。昔は、」

声が途切れる。

エイルは振り返らない。

更に地上深くにおりた光の梯子を、見据えている。背後におちる、嘲笑のような、かすかな鼻息。

金色の平原が、風に煽られて泣き啼いた。

「もう誰もいないけど

僕の仲間は僕を、イヴと呼んでいた」

視線をおとし、エイルは右の口角だけを吊り上げた。

後ろ手にコンテナの扉を閉め、馬車の荷台から飛び降りて前へ回り込む。

御者台には首なしの兵士の死体。

槍や剣で切り刻まれ、ほとんど原型がない馬4頭。

馬車の前面。コンテナの扉から見えない平原は、

見渡す限り、深紅の液体で水びだしになっている。

ただ、それらの元手となったであろう物が、無い。

エイルは軍服の下に身につけていたネックレスを外す。

蒼い石のペンデュラムが付いたそれを固く握りしめ

エイルは、自嘲気味に呟いた。

「幸せな英雄だな。君は」

血が零れる拳を、コンテナの側面に押し当てる。

どす黒く変色した外壁に、円形の蒼い紋様が浮かんだ。

突如、コンテナ全体が蒼白く発光し、背景の橙に透けていく。

塵気楼めいたその姿は音もなくひび割れ、砕けて、

さらさらと流れこぼれる燐光のかけらは、拳の中に吸い込まれるように

消えていった。

もうひとつ、胸ポケットから蒼のペンデュラムを取り出す。

深紅の中央にひとり立ったエイルは、ゆるやかに、蒼石を放り投げ

る。

コツンツ。

放られた蒼い粒は、土から顔をだしていた子供の頭ほどの岩にぶつか
った。

「まだ」

風が、啼く。

嘆くように湧き上がった世界の音に、エイルはただ煽られ、立ち尽
くす。

「こんなにも」

あとには

世にも美しい、天国の似姿と

見渡す限りに横たわる、五体不満足な人間の死体と

独り俯き頂垂れる、勝者の国の英雄だけが残された。

t o b e c o n t i n u e d . . .

第二章 一日目

夜半に切れる蜘蛛の糸

ここは、本国よりも寒い。

エイルは琥珀色の目を淀ませ、空咳をこぼしながら、夜霧に煙^{けぶ}った坂の街道を歩いていく。

黒い雲に埋もれた満月は、切れかけの電球のように弱々しく明滅しており

唯一の光源としては、まったくもって頼りない。

前屈みに進んでいたエイルは

ようやく坂を登りきり、深々と白い息をついて顔をあげた。

「……いつ見ても、良いな。此処は」

声音よりも吐息の勝った囁きは、突然響いた鐘の轟音に掻き消された。

眼下にひろがる、赤と黒。

山肌の黒、空の黒が折り重なった漆黒の底に、

マグマのような赤い街灯りが溜まっている。

街を囲い、空に届きそうなほどに聳^{そび}えた山肌には、

赤いふもとから山の中腹にかけて、

糸のような山しるべの光が一本、這いあがっていた。

空から降りてくる、カラスの声と、墨色の羽々。

視界のなかでちらつき、ふいに鼻先をかすめた一片を手ではらって、

エイルはひどく冷めて眩く。

「……天国みたいだ」

警鐘が鳴り響いている。

街へと下る街道は、血だまりに俯せる死体で埋め尽くされている。むせかえるような、鉄の臭い。

どの死体の傍にもナイフの鞘や、血糊にまみれた剣が落ちており、エイルと同じ緑の軍服を着た死体はひとつもない。

ぼろぼろの黄ばんだローブを着た、若い女子供の死体しか無かった。

「どの辺が、天国なんですか？」

不意に、艶やかな声あてが響く。

エイルの前方。死体の道の中から、ふらりと人影がたちあがる。

燃えるような街の赤に映える、蹠丈くろぶしの黒いロングコート。

目深にかぶった制帽をとり、シヨートの黒髪を軽くゆらして、女は微笑する。

袖口からのぞく女の両手は、べつとりと血に濡れていた。

小首をかしげた女を、見据えるエイル。

やがて彼は、伏せがちに顔をそむけて呟いた。

「死人しか居ない」

それも生前はおそらく、

罪も無き。

小国ヴァルシスの心臓部。別名、シャイエの墓。

100年前、建国者である英雄シャイエがここで処刑されて以来、長きにわたり「王の不在」を保ち続けてきた、ヴァルシスの首都である。

今回の紛争で、敵国であるアリオンが最も侵攻に手こずった区域であり、

イヴを含め、ヴァルシスの風雲児たちが最後に集い、倒れた、落城の地でもある。

警鐘が鳴り続けている。

誰も居ない大通りを、エイルは女と並んで歩いていく。

「独りで出歩かないほうがいい。ただの医者だろう、君は」

「軍医ですよ。残党狩りがあったので、後処理を」

女はポケットに突っ込んでいた紅い右手をぬき、エイルの袖口をきゅつと握った。

女の手首には、かすかに明滅する蒼のペンデュラム。

「不気味だな」

「……ですね」

女は、赤く照らされたあたりの廃墟を見回している。

エイルは、女が掴んだ方の腕を、目高にひきあげた。

「君がだよ。ロンド」

ロンドはきょとんと、エイルの袖にぶらさがっている自分の手を眺める。

きっかり、2秒間。

「……ッ！」

手を引き、ロンドは飛び退る。

エイルはどこか据わった目で、血のついた腕をおろした。

「誰だ？」

ロンドは、戸惑ったように自分の手首をおさえている。

エイルはゆっくりと、ロンドに歩みよる。

顔をそむけているロンドの顎をとらえ、正面にひねるエイル。

彼はついに、彼女の怯えた目を見据えた。

「誰をかくま匿ってる？」

ロンドは肩を強張らせたまま、エイルを睨み返した。

「誰も。ただの猫です」

「猫は袖を掴まない」

「くわえる口はありますよ。戦ばかりで、そんなことも忘れたんですか？」

ウエリテリセ大尉

エイルは、ロンドの手首に巻きついたペンデュラムをむしり取る。

透明な蒼石の中で、ちいさな光の点がひとつ、さまよっている。

エイルは眉間に深く皺を刻み、石をロンドの鼻先につきだした。

「殺せ」

揺れる石を追わず、ただエイルを凝視するロンド。

「猫なら殺せるだろ」

これ以上はないほど、黒瞳を見開いた後、

ロンドは、肩をおとしてうつむいた。

「……殺せますよ」

おとが頤をあげ、

ロンドはペンデュラムごと、エイルの手を握りしめた。

「何だって」

血の気がうつせるほど、強く。

おり重なった指の隙間から、燐光がこぼれた。

ふたりの間を分かつように、光が集まる。

それは、五体満足の子供のシルエットをかたどり、

「……………」

ロンドはかすかに、口をうごかした。

小さな、贖罪こくわいの言葉だった。

人型の光がひび割れ、煌めく粒子が舞う。

光の砂を振り落とすように、ふるふると頭をふる幼い少年。

黄ばんだローブを着た彼は、ロンドを見上げ、不安げにつぶやく。

「もう、危なくない……？」

ロンドの袖に、手を伸ばそうとする少年。

ロンドは、少年を見下ろしている。

コートのポケットから抜かれた紅い右手には、細身の拳銃がにぎられている。

とても儂げに、ロンドは微笑んだ。

「危なくないよ」

左手でそっと、少年の両目を覆う。

間髪入れずロンドは

少年の首筋に、銀の銃口を押し当てた。

「ねえ、エイル」

紅い街灯。

廃墟に囲まれた大通りのさなかに横たわる、小さな子供の死体。その傍に立ち尽くしている、死神のような格好の女は、力なく拳銃を取り落とす。

開いた背中への切り傷と、さらに真新しい首の銃痕から血を流す遺体を見下ろして、

ロンドは心底つらそうに、かすれた声を絞り出す。

「君は、……本当に変わったね」

エイルはロンドに背を向けたまま、虚空を見つめて呟く。

「慣れただけだ」

声こそ、淡泊な音だったが。

「お前も、同じだろ」

エイルの憂いげな目にはわずかに、たゆたう膜がともっていた。

靴音を響かせ、紅い闇に消えていくエイル。

ひとり取り残され

かくつと膝をついて、ロンドは涙をこぼした。

「慣れて、ないよ」

赤くなった少年のローブをたぐり、胸元に押しつけて、ロンドは子供のように泣きしゃぐった。

「慣れたく、なかつたよ……！」

遙か遠くの山肌に這っている、ひとすじの光。

山むこうにある、楽園と呼ばれた隣国アリオンへの道しるべとして、建国者の英雄シャイエが作らせたそのしるべは、山なかばで途切れている。

楽園に届くことなく、途切れている。

t o b e c o n t i n u e d . . .

第二章 一日目

夜半に切れる蜘蛛の糸（後書き）

2009/11/08

推敲

いつそう狭まっっていく空間を見上げ、身動きも取れずに、イヴは鼻で笑った。

「ペンデュラムラインに、生きた人間を幽閉あげく空間拷問……？」
虚ろな目で、うつむくイヴ。軋む空間のなか、床の赤が目映まばゆくなっ
ていく。

「……ヴァルシスの民なら、死罪だ」

紅い光がひび割れた。

イヴの足元で、藍色の穴が口を開ける。

その藍の中に背中から落ちながら、

イヴは自分に悲鳴をあげてついでくる首の鎖と、

鎖が繋がる、今や紅と藍がグラデーションをなす夜空のような天井を
かすめ見る。

「首吊りで死ぬとは、思わなかったな」

嘲笑めいた眩き。

たわみを伸ばしきらんとする鎖、

天と自分を繋ぐ、いまや首つりの縄となった鎖を

イヴは噛み切りそうな目で睨みつけた。

視界がブラックアウトする、その瞬間まで。

英雄の伽 第三章 一日目 メルヘン

第三章 一日目

メルヘン？（後書き）

すこし長い章になりそうなので、分けました。

「英雄の伽」を書くに至った、

あるテーマが徐々に現れてくるはずの第三章。

それを「え、そうだったの？」なんて言われずに上手く伝えられたら、い、いいいいんですけど…… j h f l g @ ! (バグるな)

まだまだ前途多難。

だが今日も今日とて初めの一步。

けどそろそろちょっとは成長したい（笑）

いやはや、がんばります。どうかお付き合い下さい。

火和良でした。

第三章

メルヘン？

「おとぎ話でも、してやろうか」

暖炉のまえで胡座をかいていたその男は、手を打って呟いた。

古びたベルベットの絨毯を埋め尽くしている、人間の背中の中の海。壊され、夜空がぬけている部屋の一角からは、粉雪が降り込んでくる。

ひろい広間をぐるりと取り囲む、屈強そうな男たちの肖像画。床におち、雪とホコリをかぶった、愛嬌のあるシカの剥製。

広間の出口には、ぴしりと背をのばした鎧が一体、立っでいて、ところどころ背中の中の海がとぎれた場所は床がぬけており、床下の地面が見えていた。

てるてる坊主のようにすっぽりと、^{すす}煤けたシートをかぶったイヴは、橙の光のなか長い影をのばして立ちつくし、男を見下ろしていた。

男は長いまな板のような巨大な剣をひざの上に置き、この氷点下にも関わらず、

無数のえぐり傷がのこる逞しい上半身をさらしている。

自分より遙かに小さな少年を見上げ、

男は、促すように苦笑した。

「眠れないんだろ。 どうすんだ？」

イヴは男を凝視して、ガタガタと白い息をこぼしている。

男は苦笑を保ったまま、器用に10秒間を過ごした。

11秒後のことである。

「どうすんだオラアアッ!!!」

「イヤダアアッ!!!」

大剣を振りかざし、血走った目で雄叫びをあげる男に、

イヴは背中を踏みつけて、こけつまろびつ逃げ出した。

踏まれた背、踏まれてもない背が、近場から徐々にむくむくと起き上がる。

「……何したの。アレグレット」

肘をたてて上身を起こし、気怠げに長い銀髪をかきあげた足元の女に、

男　アレグレットは振りかぶった大剣を白々しく下ろした。

「俺は。何もしていない。今回は」

「したよ!!!　気持ち悪いこと言ったよ!!!」

背中を海原を渡りきり、部屋から出られるドアに背中をはりつかせて叫ぶ、

すす色のてるてる坊主。

面倒そうにふりかえった、多くの眠たげな老若男女の顔に叩きつけるように、

イヴは渾身の声をはりあげる。

「眠れないなら、おおおオトギ話!!!してやるつか、って!!!」

部屋は、寝静まっていた時よりも遙かに、静かになった。

壁に背と手をはりつかせたまま、息をつめているイヴから怪訝そうに皆を見下ろしている、アレグレットへ。

ぐるりと旋回した50近くの顔が、一斉にわめきだした。

「アレグレットが悪い!!!」

「アレグレットがお伽噺……?」

「どうせ森に迷い込んだことも斧で狼を虐殺しだすんだろ」

「無理にフィクションに頼らなくていいよ、もうアレグレットがお伽話だよ」

「いつそ絵本に帰ったら？ 仲間が暖かく迎えてくれるわよ、怪物が」

「あー、目が覚めた」

言うだけ言い、のそのそと床に寝ころんでいく人々。

ひとり、アレグレットの傍で身を起こしている銀髪の女だけは、床に頬杖をついて悪戯っぽい微笑みをうかべている。

アレグレットは仏頂面で、女の視線をさえぎるように大剣をおろした。

「何だ」

「いいえ？ どんな夢お伽を聞かせて下さるのかしら、って」

「もう話さん。気が失せた」

「そう？ 残念、損をしたわ。ねえイヴ」

女は仰向けに寝転がり、

恐る恐る壁伝いにカニ歩きして戻ってきたイヴを見やる。

イヴは気まずそうに、暗がりの壁にぺとりと貼りついて、

再び暖炉前に腰をおろしたアレグレットを、ちらと伺った。

アレグレットは、落としていた視線をギロリとイヴに差し向ける。

ぎよっと顔をそむけるイヴ。

さらに白目の中で、逃げうる限りに紫紺の瞳をそらしている。

「おい」

ドスの利いた、低い声が囁いた。

イヴは目を横に逃がしたまま、強張った顔だけを何とか、声の主へ向ける。

しばらくの逡巡のあと、

イヴはようやく、暖炉の方を見た。

たくさんの仲間の背中が、床を埋め尽くしている部屋。

その端に横たわり、優しげにイヴを見ている銀髪の女。

暖炉の前で大きな剣をひざに置き、火影に照らされているアレグレットは

イヴをまっすぐと見据えている。

やがて彼はふっと、微苦笑した。

「緊張はとれたか」

大剣を担ぎ上げ、アレグレットは壁に張り付いたイヴに歩み寄る。

「初戦の夜は、誰でも緊張する」

大きな手のひらで、釘付けになって見上げるイヴの額をぼんと叩き、横を通り過ぎるアレグレット。

イヴは呆けた。

呆けたまま振り返り、うわごとのように、大きな背に問いかける。

「アレグレット、も……」

「アレグレットは、とくべつ」

銀髪の女は身を起こし、軽く伸びをした。

妖艶な容姿に似合わぬ、無邪気な笑顔をうかべて、彼女は付け足す。

「と。いう事にしておきましょうか。一応この国のリーダーだから」

「リーダーじゃない」

間入れず、淡泊な声が割り込む。

アレグレットはどこか近寄りがたい気配をにじませ、

二人に背をむけたまま呟いた。

「ヴァルシスに、リーダーは居ない。1000年前からそれは変わらない」

迷いのない言葉だった。

銀髪の女はそっと目を逸らし、ひとりごとのように囁く。

「アリオンに勝って、ヴァルシスがアリオンから独立出来れば、最も独立に貢献した者が王になるんじゃないの？ 民衆の支持を得て」

「ここはそういう場所じゃない」

「アレグレット。もし戦争に勝ったら」

「ヒュイ」

わずかに振り返る素振りをして、アレグレットは再び、銀髪の女

ヒュイの言葉を遮った。

伏せがちに顔を背けたままのヒュイを一瞥し、アレグレットは突き放すように扉を押し開く。

「……俺の先祖の前で、そういう話はしないでくれ」

振り返らず、広間を出て行くアレグレット。

パチツ、と大きく、くずれた薪が火の粉を散らした。

部屋は不気味なほどに、物音ひとつ、寝息ひとつ無い。

小さく息をついて、ヒュイは肩をおとした。

「先祖の前だから、したのよ」

ヒュイが哀しげに見上げる先にならって、イヴもそつと顔をあげる。部屋をぐるりと取り囲んでいる、たくさんの男の肖像画。

最も絵として年若い、まだ新しい肖像画の中に、黒の正装を着た、実物よりいくらか威厳のあるアレグレットがいる。

イヴはそれを見上げながら横目で、黙っているヒュイを心配そうに盗み見た。

ヒュイは顔をあげ、哀しそうに微笑んでいる。
憂いげな、深い蒼の目にゆらぐ火影。銀の長い髪が橙に透きとおって、

イヴは思わず、彼女の横顔に魅入った。

「本当にアレグレットは、メルヘンな男だよね！」

地響きのような、ずぶとい声だった。

びくうっ！ と、肩を跳ね上げるイヴ。

四方上下を目まぐるしく見回し、誰も起き上がっていない室内に目を白黒させ、

やがて笑いをこらえているヒュイと目が合う。

「な、な……なに、どこ、誰?!」

顔を真っ赤にしながら口をぱくつかせるイヴに。

「は、はじめてこの屋敷に来た時は、私もそういう反応をしたわね」

ヒュイは涙が出るほど笑って、扉の方を指さす。

不意にガシャツ！と音をたてて、扉の横の鎧が首を傾げた。

「もう、存在がメルヘンですからね！ 英雄シャイエの第一側近の家系ですからね！」

兵士の鎧は誇らしげに胸をはり、剣をかなぐり捨て、

ガシヨッ！！ と諸手をあげて絶叫した。

n e x t e p i s o d e . . . c o m i n g s o o n

第三章

メルヘン？（後書き）

き、切り処が……！！分からん……！！え、もちろんぼくの首の話ですよ（違つ）。隔日って言ったのにね。処刑だね。今日は二回更新です。隔日は守れなかったけど、量だけでも追いつくその精神。

（ちゃんと書け） 更新二回目は夜を予定しております。

はてさて、この世界に存在するメルヘン（おとぎ話めいたこと）にすこしずつ触れていく第三章。彼らの不思議な力の正体とは？この「おまえの存在がメルヘンだよ」な鎧は？どうぞごゆるりとお付き合いますませ。

第三章

メルヘン？

そのやかましい鎧は、足だけは土台にくくりつけられており、自由に動くことは出来ないようだった。

鉄の関節を大いに騒がせながら、

鎧は大舞台のプリマドンナでもそこまでしないだろうというほど大仰に

よよよーっと泣き崩れ、……ようと試みている。実際はせいぜい、鎧と床の角度が垂直から45度くらいになる程度である。

なんとか膝をつこうと前や横にうねり、反り返る鎧は、見ていて非常に、非常に、気持ちが悪いものだった。

「シャイエに死ぬまで付き添った臣下の家系！

それが王になってはならぬのでありますよ！」

「まあ、鎧さんたら。大事な初代さまの御劔みづるぎを投げ捨てるなんて」

「素敵でしょうー！」

「そうね、すてき」

ヒュイは全く大したことなさそうに、

穴の開いた壁からすっ飛んでいった剣を追い、のんびりと出て行く。

イヴはただただ、鎧を見つめて固まっている。

鎧も諸手をあげ、膝を前屈しかけたまま、顔だけをイヴに向けている。

鎧は何を思ったか、直立不動に戻って敵かに宣言した。

「私のことをただの鎧と思わない方が良い」

「……中の人は何歳か知らないけど、はやく大人になった方が良いよ、君。」

「将来のためにも」

鎧は今度はわてわてと両手をばたつかせ、猫背格好、ネコ撫で声で話し出す。

「何を言いますか、中に人など居ませんとも！ ええ居ませんとも！」

「いるに決まってるだろ、じゃなきゃそんな」

「入ってないのよ。誰も」

御劔をかかえ、雪をつけて帰ってくるヒュイ。

鎧はガシヨンツ！と姿勢を正し、うやうやしく剣を受け取った。

「いや、かたじけない」

「いいえ。いつそ折ってしまえばよかったのに」

「何てことを仰るか！ いやまったくその通り」

「どっちだ」

ぼそりとつつこむイヴ。

ヒュイは苦笑して、イヴの額をぺちりと叩いた。

「どっちも本当なのよ」

「……はあ？」

「鎧さん。仕掛けのタネを、ちょっと貸していただける？」

鎧の胸元を指で撫でながら、妖艶に微笑むヒュイに、
鎧はガシヨーツ！！と身を正して声を張り上げる。

「ヒュイ殿であればいつでも！ 胸でもツ！！ 体でもツ！！！」

「他には何もいらないわ」

さらりと言うと、ヒュイは鎧の頭をがこんと外して手をつっ込んだ。

イヴはただ、口と目を生氣無く開いて、

気持ちの悪い至福の声をもらす、首のない鎧と、

物置箱でもあさるような淡泊な顔で鎧の胴体に手をつっ込んでいる
目麗しき女、という

このうえなくシユールな絵を呆然と見つめていた。

鎧の奇声が止まった。

文字通り、ネジが切れたように黙り込んだ鎧から手を引き抜いたヒ
ュイは、

ふわりとイヴの前にかがみ込む。

驚き、我にかえったイヴを、感慨深そうに覗きこむヒュイ。

「明日からあなたも、ヴァルシスの義勇兵なのね」

「……何？」

落ち着かなげに、顔をそらすイヴ。

ヒュイは肩をふるわせ、楽しそうに笑ってみせる。

「いや。膝をついたら、顔が上にあるんだもの。おおきくなったな、

って。

あんなに小さかった子がもう13歳で、最年少の義勇兵だなんて、……アレグレットも、すこしは昔と変わればいいのにね」

ヒュイは、笑いながら、哀しい顔をする。

イヴはそんなヒュイをかすめ見ては、やるせない顔で目をそむけた。

そのはかなげな微笑は、

派手で妖艶な外見からは想像もつかない、彼女のとある癖だった。

この微笑で、加えて、ひとりごとのように質問をつぶやいたら、たいてい彼女は相手の答えをある程度、決めつけている。

相手の出す答えは、自分の望む結果ではないと踏んでいる。

「……たとえばの話なんだけれどね。

5年前、もしアレグレットが、国境であなたを拾わなかったとしたら」

言葉が進むにつれて、ヒュイの美しい顔からは明るさが失せていく。残ったのは、哀や戸惑いの混ざった微笑だった。

そして彼女は、ひとりごとのように呟いた。

「あの時アレグレットや、私に会わなくても、

イヴはこの国に来て、義勇兵になったのかしら」

俯いたヒュイを見下ろす、イヴ。

突然、イヴは尻餅をつくほどに、勢いよくしゃがみ込んだ。

驚いたように見つめるヒュイと目を合わせたかと思うと、

イヴはふいと横向いて、呟いた。

「これくらい」

「……え？」

座った自分の胸あたりを手刀でかるく切りながら、

イヴは仏頂面でたどたどしく、話し出した。

「5年前は、いつもこの高さにヒュイの顔があったんだよ。

7歳のガキだった僕に合わせて、いつもこれくらいにかがんだ。

アレグレットも、僕がどこに行っても、どこまでも追っかけてきてさ。

稽古中に僕が崖から落ちたときも、落ちなくて良いのに落ちてきて、

僕よりも多くあばらとか色々折ってた。

稽古中は血塗れになっても放っておく癖に、

稽古が終わるとヒュイがすっ飛んできて、じべたに座ってケガの手当てして、

……だから、僕は、自分がおおきくなったとか、身長伸びただとかはあまり、

感じたこと無い。

いつも二人が目線合わせて、屈んでくれてた」

戸惑ったように、だがしっかりとイヴを見つめているヒュイ。

イヴはそんなヒュイに気づくと、

困り果てたようにシーツのフードを目深に引っ張った。

すすけた布からのぞくのは口もただけで、あとはすっぽりと、シーツをかぶっている。

「僕は、……俺は、この国に生まれたわけでもなんでもないけどさ。命はずっと、アレグレットとヒュイに貰ってきたよ」

暖かい火の灯りに照らされながら

大きなてるてる坊主は恥ずかしげにそっぽを向いて、そう呟いた。

「だからそのたとえ話は、本当に、ありえない事なんだって」

「……そう」

吐息に音をのせただけの、ヒュイの読めない囁き。

イヴはフードのすそを少し上げ、

真っ赤に染まった、すねたような顔を覗かせて

「うおっ……ッ!？」

身を引き、のけぞった時には、遅かった。

頭を優しく抱き込まれ、体ごと、柔らかいヒュイの腿にひきあげられたイヴは、

哀れなほどに目を白黒させ、硬直した。

優しく、しかしまだ僅かに悲哀をのこして微笑みながら、ヒュイはイヴの頭をそっと、ぼんぼんと撫でた。

「戦場に、出したくないな」

上からの穏やかな声に、イヴは困ったように笑った。

肩のこわばりをといて、

ごどもらしい、いたずら好きな少年の顔でヒュイを見上げる。

「ヒュイらしくないね」

「そうね。いまちよつと感激しているから、混ぜってしまったのかも。」

自分から誰かを抱きしめるなんて」

無邪気に笑ってヒュイは、綺麗な拳をイヴの目の前に差し出す。白い指のすきまから、蒼い燐光が水のように滴っている。

イヴは今一度、ヒュイを見上げた。

彼女はいまや、

ヴァルシスきつての知将と呼ばれるに相応しい、凜とした面持ちでイヴを見下ろしていた。

花開くように、ふわりと解かれる拳の力。

中には、まばゆく光る蒼の石がひとつ、乗っている。

「ミストルテイン。ヴァルシスでは、そう呼ばれているの」

「……ミストル……武器なの？ これ」

「おそらく最強のね。使いこなせば、世界で一番強くなれるですよ。」

造り方も、原石を使いやすいように加工するだけ。

アリオンでは、タスラムと呼ばれているらしいけど」

「へえ……」

蒼の光を眺め、吸い寄せられるように手のひらを差し出すイヴ。ヒュイは拳をすつと遠ざけて、真摯に首を振った。

「本当はね。ヴァルシスでは使用を禁止してるものなのよ。」

アリオンから独立しようとしたとき、

シャイエは、この石の売買と所持だけは固く禁止したの。

名前もわざわざ変えて」

「ミストル……？」

「ティン。意味は災いの矢。ただの自然物なのに、

唯一神を殺せる凶器になった、宿り木の名前からとっているの」

「最強の武器なのに、禁止したの？」

怪訝そうなイヴに、ヒュイは微笑して小首をかしげる。

「この石は、ずっとずっと昔から

人間が戦争をしている地域の、綺麗な滝の奥にだけ、結晶をつくるの。

使いこなすには才能と努力がいるけど、数には絶対困らない。

アリオンでは、神から借りえた『神具』だといってこれを崇めているけど

シャイエは、……そうは思わなかったみたいね」

「その話なら、十八番だったんだがな」

驚いて二人は、広間のドアの方を振り返る。

いつの間に戻っていたのか。

壁にもたれて腕を組んでいたアレグレットは、

不満そうに大剣を担ぎ上げ、暗がりから灯りのなかに踏みいった。

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

第三章

メルヘン？（後書き）

Q・主人公の姿が見えないんですが、仕様ですか？ A・なにを
いっているんだい！ みんな、しゅじんこうだよ！ いくら何で
も出番なさすぎだろう。本当にね。影薄い主人公やってんですか、
そろそろ出番ですよ。みなさまどうぞ、彼が出てきたら生温かく
迎えてやって下さい。

第三章

メルヘン？

暖炉の傍まできたアレグレットは抱かれたままのイヴを見下ろすと、少々乱暴にかついだ大剣をすべり落とし、唇をとがらせた。

「いーな〜イブ〜」

「思ってないくせに」

イヴの頭をぎゅっと抱え込んで、拗ねたように暖炉の火を睨むヒュイ。

「思っつかよ」

アレグレットは、伏し目がちに笑った。

彼は不意に、イヴを抱き込んでいたヒュイの腕を引く。

彼女は驚き、頤おとがをあげる。

腕の庇ひさしが消え、急に射した火の灯りに目を細めて、

イヴはヒュイの肩口に額をよせ、影の方へ顔をそむけた。

女の華奢な手首を引き、黙って見つめる男。

引かれた手を預けたまま、男を見上げている女。

お伽噺を切りとったような影絵が、床に映っている。

イヴはそっと、そむけた顔を灯りの方へ戻す。

白い薄衣を羽織った 華奢な腕が伸びる先に、遅しい男の腕。

アレグレットは

彼にしては珍しい、なにかをためらっているような顔で、

ヒュイを見つめている。

不意にアレグレットは、視線に気付いたようにイヴを見やった。逸らさず、黙って見つめ返すイヴ。

先に目を逸らしたのは、アレグレットの方だった。

引いていたヒュイの手からミストルティンを取りあげ、アレグレットはゴミでも投げるように、石を鎧の中へと放り込んだ。

「あまり、長々と持つな。何人入ってると思ってる」

カラカラ……と、石の跳ね回る音がようやくやんだ頃、鎧と向き合うアレグレットは、ぶっきらぼうな呟きをよこした。

とかれた腕をゆっくりと床におろし、ヒュイは再び、暖炉の方へと向き直る。

イヴの視界にもどってきた美しい横顔は、火影のためか頬がほの紅い。

やがてヒュイは、ふと口元をゆるめて、困ったように微笑んだ。

ヒュイの膝から、イヴは立ち上がった。

「お入りになっっているのは12人ですとも！

我が家 歴代の党首が満載のミストルティンでございます！

そしてお前は13人目でございます！」

兜を戻されたたん、渾身のジエスチャーとともに喚きだした鎧にアレグレットはめんどくさそうに何度か頷いた。

「7代目のジジイがシヨタコンの変態だったな。混ぜったんじゃないだろうな？」

うちの軍師に変な不純物まぜんよ」

「だれが不純物！ この高名なるヴァルシスの英雄に向かつて！」
「黙れ」

がんツ！と鎧の股間を蹴つ飛ばし、

アレグレットはようやく、暖炉の前に腰をおろした。

禅をくむようにあぐらをかき、

やけにクソ真面目な顔で考え込んだ後、ぼんと膝をうつ。

「7代目だけ、歴史から消そう」

「あなたの思考回路って、本当に理解できないわ」

一転して、冷め切った目でシートにくるまり、寝転がるヒュイ。

アレグレットははまだ真剣を崩さず、無駄に厳おこそかに続ける。

「かれこれ10年、あのジジイどもを維持してきたけどな。

7代目は俺の脳みそに余る。

やたら干渉してくるしエロいし変態だし、とにかくやかましい。
混ざりたくないジジイランク1位だな。

そろそろ子供のひとりでも産んで、俺は前線から退いてだな。
脳みそをリフレッシュしたいんだよ」

「そうね。まず生まれ変わって、子宮をもつことから始めましょう
ね」

「めんどうだ。貸してくれ」

「バカの子は産みたくないの」

三人で暖炉をかこむように、イヴはすたとんと、二人の横に座り込む。

「さっきから、混ざるって……なんのこと？」

アレグレットはしばらく真っ直ぐに、揺らぐ炎を見つめていた。うずうすと説明したそうに首を伸ばしている鎧が、ガシヨッ。ガシヨッ！ とこれ見よがしに甲冑を鳴らし、イヴにアピールしている。

アレグレットは、鎧を目だけで一喝した。

二の腕についた革のバンドを外し、内側に仕込まれたケースから、小指の爪ほどのミストルティンを手のひらにこぼれ落ちるほど振りかける。

「触るなよ。今は見るだけだ」

「ひとつくらい」

「これは純度が高い。慣れてない奴が触ると、

まあ……混ざるんだよ。一発で」

ちよいちよい、とえり好み、少々蒼の薄いひとつぶを指でつまむと、アレグレットは残りをケースに流し入れた。不満と怪訝のまざった顔で、しかし身を乗り出して、イヴはアレグレットの手のひらを覗きこむ。

「ミストルティン。『裏側』に潜れる、唯一の物質だ」

「ウラ……?」

「俺やお前がいるここがオモテだとして、
そうだな……『時間と切り離された場所』っていう感じか？
何て言ったらいい」

「場所のイメージとしては、海のなか、鏡のなか、闇のなか……そんな感じね。」

オモテの人間をウラ側に押し込んで幽閉したり

ウラ側に潜って、オモテのある場所に顔を出したり。

人間の人格や記憶を、ウラに閉じ込めて引き出せるようにしたり。

出来ることは無数にあるけど、リスクも、とても大きい。

ウラ側にはまったく『時間』や『位置』や『境界線』がないの。

だから、ウラに落としこんだものが元のオモテへ帰るためには、

『帰る時間』と、『戻る場所』と、『オモテに戻るまで、形を保つ箱』が必要なの。

それを設定して、落とすモノに鎖をつけられるのが、ミストルテイン。

でもその鎖を オモテに戻すまで『維持』できなければ、

オモテには 二度と帰ってこれなくなる。

『維持』するには、脳のなかですっと

その情報を『おぼえて』いなければならなくて、

まあ常に、あたまの片隅に置いておくって感覚かしらね。

逆にそれを逆手にとって、

ウラ側におとして『維持』を解除して、相手を殺してしまうとかね。

ヴァルシスでは絶対に禁止されているけど、
手軽に一気に殺せるのは確かだし。

ウラの世界 ペンデュラムラインって呼ばれているけど、

時間軸も、精神の境も肉体の境も壊れた人間がどうなってるのかなんて

誰にも分からないけど、

ラインに落ちた人は絶対に帰ってこないから。

死んだ、ってことにされるわ。

これを使い続けた人間の末路を見れば、

最期にどうなるのかは、予想がつくものだし」

言葉の最後でヒュイは胎児のように体をまるめ、アレグレットに背を向けた。

アレグレットは暖炉を向いたまま、空に目をおとしている。

どこか沈んだような二人に、イヴは一瞬とまどったように、言い淀む。

しかしやがてアレグレットを見すえ、尋ねた。

「最期は、どうなるの？」

イヴを横目で見据え返す、アレグレット。

壊れた壁からのぞく夜空は、薄い藍に変わっている。

雪はもうやんでいて、朝の静けさと染みいる冷たさが、肌をさす。

こそ、こそりとさざめき出す、人の背の海。

アレグレットは目を後ろへながし、あたりの気配を一瞥すると、大剣を持って立ち上がった。

「そろそろ支度しろ。」

ああ、……俺も初陣の夜は寝られなかった。心配すんな」

相手を安心させる、普段どおりの不敵な微笑だった。背を向け、扉の方へ歩き出すアレグレット。床に横になったままのヒュイは、そっと目を伏せる。

あの、哀しそうな表情だった。

拳を握りしめるイヴ。

歩いていくアレグレットの二の腕をわし掴み、強引に振り向かせて、イヴは怒鳴った。

「最期はどうなるんだよ……！」

隠したって、いつか分かることなんだろう？」

「分かるよ。今日にでもな」

アレグレットは腕を掴まれたまま、イヴを見下ろす。

イヴは思わず顔を引きつらせ、腕から手を離れた。

アレグレットは静かな気迫をむきだしたまま、つぶやいた。

「お前は、ミストルティンには手を出すな」

ふたたび歩き出すアレグレット。

扉の前で立ち止まり、彼は挑むように呟いた。

「あれは、断頭台だ」

彼が押し開けた扉のむこうには、

雲一つない夜明けの空と雪原がひろがっている。

やさしい薄桃と、藍の光。そのなかにひとり立つ背に目をこらすイヴ。

ちいさくイヴは、口を動かした。

「あんたはもう、登っちゃったわけ……？」

扉が重々しく、閉まる。

イヴの足元の床が、たゆたうようにゆらりと歪んだ。

よろめくイヴ。その紫紺の目から、涙の粒がひとつ、こぼれて散った。

掴むものもなく、眼前にせまる床を呆然とながめる。

その首元に、乱れた映像のようなノイズとともに、鉄の首輪がうかんだ。

鎖の鳴る音がする。

イヴはいつの間にか、薄暗い銀色の空間を真つ逆さまに落ちていた。

大量のモニタがそこにあるかのように、

空間という空間を映像がうめつくしている。

アレグレットが人懐っこく笑っている。ヒュイが泣きしゃぐっている。

薄汚い、スラム街の町並み。ヴァルシスの夕焼け。

血塗れの背中の中の海のなかに、アレグレットが立っている。

愛用の大剣を 血を吸い尽くしてびちゃびちゃになった地面に突

き刺し、
柄に額をあてて頂垂れている。

イヴは落ちながら、小さくつぶやいた。
心底、 哀願する声だった。

「アレグレット」

彼は、顔をあげた。

横顔にかかっていた髪が、風梳すかれて揺れる。
その狂気めいた顔がこちらを向いたとき

すべての映像は、白に塗りつぶされた。

鎖がひときわ、大きく啼いた。

首をぐつと引かれ、イヴは息をつまらせて目を剥く。
足元に延々と続く白の床に、
長い長い鎖の影と、

その先端にテルテル坊主のように吊るされている、子供の影がうつ
っている。

ふいにぷちんと、首元の鎖が切れた。

ヒザを思い切り打ち付け、イヴは倒れ込む。

何度か咳き込み、くらむ頭をふって、イヴは上半身を重たげに起
こす。

目の前には、もう白の世界は無かった。
堅牢な鉄格子と、その向こうに立つ緑の軍服の青年。
エイル・ウエリテリセ大尉が、ミストルティンを手に
イヴを静かに、見下ろしていた。

t o b e c o n t i n u e d

第三章

メルヘン？（後書き）

ジャンピング土下座ですね、わかります。

違うんだ！ 書いていたけど切り刃がわからなくてももうだめだ死のうでも必ず、書ききりますんで。それはお約束です。

それではやっと出てきた主人公、エイルとイヴの物語にもどっていきましよう。おとぎ話はまだまだ続きます。

火和良のHPはこちら<http://aria00007.blog>

61.fc2.com/

第三章

メルヘン？

右には、粉状の灰だけが残る、レンガ造りの暖炉。

床には、血の黴^かびた黒と、元の紅がまだら模様になっている、見渡す限りのベルベットの絨毯。

左には、夜の藍が見える、穴の空いた壁。

そして正面には、

豪華な両開きの扉と、胸をはって仁王立ちしている首なしの鎧がある。

イヴは目を見張り、檻の格子にとびついた。

「……ここは……」

「売国奴シャイエの第一側近、ダルオンの屋敷だ。

今日はここに泊まる」

広間の中央に置かれた、中型犬一頭が入れる程度の檻に、
エイル・ウエリテリセ大尉は重い靴音を響かせながらゆっくりと歩み寄る。

狭い檻の中でイヴはなんとか首をもたげ、声のする頭上を振り仰いだ。

首の見切れた軍服の青年。

おそらくこちらを見下ろしているであろう、無数の勲章のついた首元を、

イヴはえぐるように見据える。

「ヴァルシス首都の中心地。

シャイエの屋敷にもっとも近い、従者の皆のひとり。」

お前達が最後まで籠城した、決戦の場所だ」

「悪趣味な宿だな……最後にあんたと話してから、何日経ったわけ？」

「まだ9時間しか経っていない。」

せいぜい懐かしむといい。もう二度と、来ることはないだろうからな」

踵きびすをかえし、扉の方を向くエイル。

その横顔をかすめ見て、イヴは剣呑な目をわずかに見開いた。

眉根をよせ、口元を引きしめて、つらそうに虚ろな目をおとしている。

無関心で、冷酷な声をよこした主にそぐわない、まるで親友の葬式に参列しているかのような顔だった。

イヴは思わず、格子をつかんで声を張り上げた。

「あんたさ。何がそんなに哀しいんだ？」

緩慢に、立ち止まるエイル。

ふたたびこちらを向いた彼は、あの淡泊な無表情に戻っていた。

機敏に、妙な気迫をおびて血の染みた絨毯を直進してくるエイルに、イヴは怯ひるむことなく、言い放つ。

「さつきから、何でそんな」

「腕を組め」

「う……は？」

「拘束布が『落ちて』いる。腕を組め。」

それとももう、腕は必要ないか」

見下ろすエイルの目に、憂いの色はかけらもない。

イヴは不満そうに睨んだ後、そっぽを向いて二の腕を抱く。

「『落とした』のはおまえだろ。維持も出来ないヘタレが」

「維持も出来ない……？ はじめて言われたな」

「最悪だよ。箱は乱れるし走馬灯は見えるし、もう処刑されるのかと思った。」

手っ取り早く、ペンデュラムラインで首を吊ってさ」

「安心しろ」

皮肉げに笑うイヴに、

エイルは胸のペンデュラムを淡く発光させながら、生真面目に呟いた。

「おまえは丁重に殺される」

9時間前と同じく、白い拘束布に締め上げられるイヴの上半身。半ば呆れ気味にイヴは、背中を檻に預ける。

「どうぞ、お構いなく」

「そもいかん」

「あのさ、大尉さん。皮肉って言葉、知ってる？」

「知識としては」

「疎いってことね……」

あさっての方を向き、ニヒルに呟くイヴ。

エイルは怪訝そうにイヴを見下ろし、ペンデュラムを軍服の下にしまい込んだ。

緑の布地の下にもった光は、やがて遠のくように小さくなり、消

えた。

「お前の他に、2945人抱えてる。多少の不具合は赦せ」

「……2945人？」

「死体含めて、4263人。文献が23407冊、武器類が825

……

そろそろ、容量が厳しいところだな」

簡単な数式を読み上げるような平然とした呟きに、
ただ呆然とするイヴ。

目の前の、腰に剣を一本差しただけの若者に、イヴは顔をこわばら
せて尋ねた。

「あんだ、本当に大尉……？」

「ああ」

「嘘だ。ヴァルシスーのミストルティンの使い手でも、

そんなに容量はでかくない……！」

アリオン連合軍の総帥でも、

せいぜい100人『落とし』て維持するのが精一杯のはずだ！」

「階級と、実力が比例するとは限らない」

エイルはふと、冷笑を浮かべる。

獰猛な目に射貫かれ、

身を檻の壁におしつけたまま、すっと冷や汗をながすイヴ。

「お前も、そうだろうか？」

何をもってその歳で英雄と呼ばれたのか……この目で見てみたか
った。

語りべになれそうな、最後の決戦に居た連中は

敵も味方も殆ど死んでしまつて、

それにお前が英雄の姿でおとぎ話になるには、少々味方の口が足りない。

自分の国を好きだとはつきり言うあたり、
ミストルテインに手を出したわけでもなさそうだ。
頭がまともなうちに、自伝でも残しておくんだな」

「あんたは……」

乾いた喉をなんとか嚥下^{えんか}して、イヴは挑むように言った。

「あんたはもう、まともじゃないのか……？」

ひどく冷めた目で、エイルはイヴを見返している。
イヴは身を乗り出し、畳みかけた。

「あんたは一体、今、どこまで混ざつて」

「16歳以前の記憶が亡い」

エイルは自分の傷だらけの手のひらをながめ、他人事のように囁く。

「自分がエイル・ノンリウエスだということは分かるが、
エイルがどういうものを好んで、どういう思い出を大事にしてい
て、

どついう性格だったのか。……よく思い出せない。

最近、昨日が『どれ』だったのかも分からない。

記憶の時系列がうまくつながらないんだ。

だから日記がないと、昨日何があったのか確認できない。

軍の中に幼馴染みだったらしい女が居るが
彼女に『性格が変わった』と言われても、どこが変わったのか分
からない。

だからもう、もとのように振る舞うことも出来ない。

エイルが自分の国を愛していたかどうかも、もう亡くした。

どこまで混ざったかとあえて言うなら、もう末期なんだろう」

末期。

なんの悲嘆もためらいもなく、彼は自分にそう宣告した。
イヴはかすかに涙をためて、顔をそむける。

「分からないよ」

「何がだ」

「どいつもこいつも、みんなそうやって……！」

吐き捨てるように、イヴは怒鳴る。

「自分がいなくなるのを分かって……何のために命賭けたんだよ
!？」

最後にはそうやって何もかも、殺し合った理由も忘れて、
相手を殺してまでやり遂げたかった事も忘れて!!

そんなの、意味ないじゃないか!!」

「本当に、使ったことないんだな」

侮蔑ともとれる淡泊な声に、イヴは顔を跳ね上げ、エイルを睨めつ
ける。

エイルは冷静な面立ちで見すえ返し、やがて伏し目がちに呟いた。

「それでいい」

それはささやかな、微笑に見えた。

口元をわずかに緩め、エイルは穏やかにイヴを見下ろしている。

涙をためた赤い目をみはり、息をつめるイヴ。

踵をかえし、エイルは凜とした横顔で言った。

「なんのために闘ったかだけは、覚えているよ。」

ミストルテインは、石を初めて持った日の記憶だけは、奪わない。

100年も続いている戦争を、明日にでも終わらせるためだ。

陛下が望むなら、ヴァルシスの人間を皆殺しにしても。

そのためなら、手段は選ばなかった」

イヴは檻に背をぶつけ、詰めていた息を大きく吐き出した。

足元の黒い鉄板をにらみつけたまま、底冷えするような声で唸る。

「あんたはアリオンの人間だろ。『ミストルテイン』はヴァルシスでの呼び名だ。」

ちゃんと悪をくじいた神具の名前で呼べよ。

あの傲慢な女王陛下は地獄耳より耳が良いんだろ？」

「あの石は、神の恩寵じゃない」

ふたりは一瞬だけ、殺し合うような視線を交わした。

背を向け、扉の方へ歩いていく、エイル。

近づくエイルの足音に反応したかのように、ふたつの扉が重々しく開かれていく。

「あれは、断頭台だ」

開かれた扉の向こうには、

点描画のように藍をうめつくす、無数の篝火かがりびが揺らめいている。歩み出て行くエイルを見るなり敬礼する、大勢の兵士達。エイルはふと思いついたかのように、イヴを振り返った。

「今回のお前の護送は、残党狩りの撒き餌まもかねている」

「撒き餌……？」

「まだいくつか、主犯格の死体があがっていないからな。

おまえをアリオンへ護送すると、ヴァルシス中に流してある。

主犯格はまだだが、効果はすでに実証された」

イヴはただ呆然と、首を振った。

「嘘だ……看守は、看守の話じゃ、主犯格は全員、俺が捕まった後、……殺された、って」

「看守が希望を与えるわけないだろう」

残忍に言い放ち、エイルはさすがのようなイヴを残して、外へ続く階段を下りていく。

「誰が……誰が生きてんだよ！ 大尉！！」

軋む悲鳴をあげて、閉まっていく扉。

狭まる外への出口。

その隙間からいまだ滑り込んで伸びている、エイルの影。
彼はわずかに首だけで振り向き、囁いた。

鈍い音を響かせ、閉められる扉。

広間にたったひとつ残されたランプの灯りさえ、ふっと掻き消える。
イヴはのろのろと冷たい鉄の床に手をついた。

やがて頹れるようにうずくまり、
しっかりと届いたエイルの言葉を、絞り出した。

「アレグレット……ストラウス……」

穴の空いた壁からは、外の篝火の熱気が伝わってくる。

夜明けはいまだ、遠い。

t o b e c o n t i n u e d

第三章

メルヘン？（後書き）

……アレグレット……

ここでメルヘンはおしまいです。伽とぎは新章へと移ります。

鬱々とした話が続きましたが、次章ではどんな出会いと別れがあるのか。イヴとエイルのお話は、まだまだ続きます。火和良のHPはこちら<http://aria0007.blog61.fc2.com/>

体感温度が、変わらない。

イヴは、暖を求めるように腹にひきよせていた腿^{もも}を、檻の外へずず…と伸ばした。

いっこうに冷たいままの鉄格子から背を起こし、

イヴは2時間ぶりに、紫紺の目を開ける。

穴あきの壁の向こうは、透明な薄桃と藍に染まっている。

廃墟同然の広間に数名いる、防寒着を着こんだ兵士たちは、顔こそキリツとしているものの、肩を強張らせ、白い息を吹き出している。

細い肩はむきだし。上半身は拘束布一枚、下は薄手のズボンのみにも関わらず、イヴはしんしんと刺す冷えに震えることも、白い息を吐きながら奥歯を鳴らすこともなく平然としていた。

「……かわいいそーに」

そっけなくイヴが咳くと、一人の大柄な兵士が、鋭い眼光を差し向けた。

気怠げにその兵士を眺めると、イヴは面倒そうに首をかしげた。

「なに？」

兵士は、こぼれそうなほど目を剥きだした。猛烈な剣幕で檻に詰め寄り、怒気をおさえるように、言葉を絞り出す。

「……黙っている。轡くちを噛ませるぞ……」

「口があいてる方が、あんたらにとって好都合なんだろ。」

俺がいろいろ小細工して仲間を呼んだ方が、捜すテマも省ける」

殺気を滲ませ、拳を握りしめている巨人に見下されても、イヴは空の様子でも眺めるように、落ち着き払っている。ふと静かに睨み返し、イヴはドスのきいた声で言った。

「憎まれ口のひとつやふたつ、我慢しろよ」

男はついに、拳を檻の天井に叩きつけた。

鈍い、鉄の唸り声が響く。

ゆっくりとかがみ込む巨体。鉄格子の向こうで、血走った目がぎらついている。

「早死にしたいのか」

「……あんたには、俺を殺す方法すら無いんだろ？」

口元を吊りあげて、笑うイヴ。

一瞬、顔をこわばらせた男に、

イヴは膝をたて、不敵に微笑む顔を近づけて囁いた。

「ためしに、その剣で突き刺してみたらどうだ……？」

男は気圧されるように、かがんでいた身を引いた。

苛立ったように顔を背け、横目で睨みながら吐き捨てる。

「……化け物が」

「御宅の大尉ほどじゃ、ないよ」

どこか疲れたように、檻にもたれかかるイヴ。

男は鼻で笑って、独白した。

「あんなもの。陛下のただの玩具だ」

ギギギギ……と錆びた音を引き摺って、広間の扉が開いた。

夜明けの空を背に、扉の奥から歩み行ってくる利発そうな青年。

伏し目がちな琥珀色の目。

頬や襟足までかかった、少々長めの栗色の髪。

吐く息こそ白いが、

相も変わらず緑の軍服を纏うのみのエイル・ウェリテリセ大尉は、

檻の前にたつ大柄な兵士を一瞥すると、眉をひそめた。

「……クルグス曹長。必要以上に近づかないで頂きたい」

「呼ばれたもんでね。どうやら、お寒いらしく」

大げさに腕をひろげ、男　　クルグスは、エイルに向かって制帽

をとった。

うやうやしく腰は曲げるものの、薄ら笑いは正面を向いている。

「どうも。失礼いたしました……？」

帽子のホコリをかるく払い、短く刈り込まれた頭に乗せると、

クルグスは朝日が昇りかける外へと歩いていった。

エイルは制帽のつばに指をかけ、わずかに目深に、帽子を引き下ろ

す。

のぞく口元が、軽く引き締められた。

手をおろし、イヴを見たエイルは、いつもの冷静な顔に戻っている。

「寒いのか」

「分かってて聞くんだね」

イヴは少々、呆れたように苦笑した。

エイルは意外そうに眉をあげる。

「俺の体は、まだペンデュラムラインに浸かってるんでしょ？」

要するに、ラインからちよこつと、オモテに顔を出してるだけ。

見えなくしてるみたいだけど、たぶん鎖もちゃんとながってる。

俺が逃げようとしたらウラに引き摺り落として、

今度オモテに顔を出した時には、ふりだしに戻ってる。

ふりだしは、あんたが持つてるミストルテインの場所だ。

からだがウラにいるんだから、オモテの温度なんて分かるはず無いよ。

拘束布を『落とした』ふりをしたのも、ラインから完全に出たっ
て思い込ませるためだろ。

この檻も、本当は有っても無くても良い……ただの飾りだ。

いい詐欺師になれるよ。大尉さん」

エイルはくそ真面目に頷いた。

「そうだな。あまり私を信用しないことだ」

「あっはっは、いつになっただら通じるかなあ。俺の処刑に間に合えばいいけど」

「アリオンの首都に着くまで、この方法で護送する。
噂を流すより、お前そのものを人目にさらした方が手っ取り早い」

エイルは膝をつき、ポケットから小さな鍵束をとりだす。
檻の鍵が外れる。

キイ、とちいさく蝶番テフツツガイを鳴らし、扉が軽々と開いた。

イヴは笑っていた口を引き結ぶ。

どこか冷めた目で、縦線のない世界

広間の扉の向こう、一ヶ月ぶりの朝焼けを眺める。

エイルは、檻の横に置いてあった子供用の黒ローブを腕にかけ、

「出る。出発する」

「どういうルート？ それくらいは、教えてもらえるんだろ」

「お前達にとって、馴染みの道すじだ」

イヴは檻にもたれたまま、朝日のなか、こちらを振り返っているエイルを睨んだ。

冷徹な目で見下す軍人と、今にも殺しにかかりそうな殺気を向ける囚人。

周りの、白い息を吐き出し続ける兵士たちは、いつそう騒がしく奥歯を鳴らした。

エイルはイヴを見返したまま、口だけを動かす。

「100年前ここで処刑された売国奴シャイエの首が、
アリオンの輸送されたとおりの道で行く」

「……なるほど？ じゃあ今日は、森林浴か」

「そうだ。今日はサラドールの森を抜ける」

「抜ける、ね」

イヴはどこか楽しそうに、檻から身をくぐらせ、立ち上がった。

ぺた、ぺたりと木の床を踏みしめ、エイルのもとに歩み寄るイヴ。兵士達が僅かに緊張し、ある者は思わず、剣の柄に手をかけた。

エイルはただ淡泊に、華奢な少年を見下ろしている。

イヴの、拘束布にまきとられたままの上半身をふわりと、黒いローブで包むエイル。

弟にでも世話を焼くように、ローブの首元の紐を結ぶ。

イヴはエイルの手元を見つめながら、囁いた。

「寒くないって、知ってるくせに」

エイルは、応えない。

きゅつと蝶々を結び終わると、背を向けて歩き出す。

イヴは視線を落とし、去りゆく足元の影に言うように、つぶやいた。

「サラドールの森は、やめた方がいいんじゃない」

「……何故だ」

イヴは歩き出す。

近づく扉。兵士達の鞘鳴りが頻繁に聞こえ出すものの、扉が閉まる気配はない。

出口で足を止めていたエイルの横に、

イヴはとうとう、並び立った。

山あいの端から、日が昇っている。

ほぼ廃墟と化した故郷に、暖かい日が射し込んでいる。

目をほそめ、淡い風に髪を梳かれながら、イヴは息を吸い込み

すつとエイルを見上げた少年の目には、力強い意志が灯っていた。

「狩られるのは、どっちだろうな」

エイルを残し、階段を下りていくイヴ。

兵士が剣や銃を向けるなか、平然と歩いていく小さな背を見つめ、エイルは剣の柄に一瞬、手を置いた。

自分の命綱を確かめるように。

やがて歩き出すエイル。

歩いていく二人を見る兵士の目は、いずれも畏怖や戦慄に染まっている。

ふたたび横に並んだ時、エイルは僅かに身をかがめ、イヴの耳元で囁いた。

「弱い方に決まってる」

イヴは、エイルを振り仰ごうとはしなかった。

ただ凜とまっすぐに

前だけを見つめて、歩き続けた。

t o b e c o n t i n u e d

第四章 二日目

鈴の音が聞こえない？（後書き）

おまたせしました新章の始まり。というかこっから真の始まり？（遅） イヴの警告の意味。

そして非道ながらも時折、人間らしさを見せるエイル。

サラドールの森に何が待ち受けているのでしょうか。新キャラもあるよ（誰得）

更新状況はHPの通常ブログ画面か、twitterの「火和良」で一目瞭然だ。でもtwitterではアホみたいなことしか言っていない。アホな火和良でもいいよって人はこちらへ<http://twitter.com/clown07>

更新遅れたけど、書き終えたら首ころがすからね！それまでツケといて頂戴ッ！！

第四章

鈴の音が聞こえない？

しめった樹木の香りが満ちている。

朝つゆをふくんだ土はふつくらとしていて、素足に心地良い。

瑠璃色るりの森サドルは、深い森独特の暗さはあるものの、

愛らしい青の花や蝶、小道を照らすスポットライトのような木漏れ日のためか、

不気味さはない。

下に擦るロープを跳ねさせながら、目を輝かせて歩くイヴと、後ろからのんきについていくエイルは、どう見ても囚人と処刑人ではなかった。

吹き出しでセリフをつけるなら、こうだろうか。

「ワア、なんてすてきな森なんだろう」

「こらこら、迷子になるんじゃないぞ。はっはっは」

実際はこうである。

小鳥のさえざる木漏れ日を仰いで、イヴは息を吸い込んだ。

「この拘束具さえなければなー。おおきーく、伸びがしたいよ」

「また今度な」

「え、今度なんてある?!」

「ない」

「……」

じりつと視線で焼いたイヴはふと、エイルを透かした奥を見つめる。倣ならって後ろの小道に一瞥だけよこしたエイルは、黙って脇の樹木に背を預けた。

もう見えなくなった森の入り口へ続く道を、
イヴは瞬きもせず、目に焼き付けている。
やがてイヴは、前に向き直った。

「休憩終わり」

エイルは組んでいた腕をとき、日の当たる小道に戻る。
先の長い、藍と水色の小道に立ち尽くしていたイヴは、
背後の靴音が追いつく前に、足早に歩き出した。

揚々とした足取りではなく、凜と。
まるで後ろなど、存在しないかのように。

第4章 鈴の音が聞こえない

> i 2 9 5 7 | 4 9 8 <

焼きごてでも押しつけられたかのような絶叫が、小道の脇からあが
る。

森が深まるにつれ、得体の知れない気配がそばで動くようになった。
すっかり高くなった樹木の空から目をおろし、イヴは、途切れた足
音の方を振り返った。

森の蒼のせいだろうか。

すこし蒼白い顔をしたエイルが、剣の柄に手をかけてあたりを見回している。

「どうしたの」

「……いや。何でもない」

イヴを追い抜いたその横顔は、やはり蒼白い。剣の柄に置かれたままの手をちらと見ながら、イヴは小走りに、彼の後ろについた。

「ヴァルシスの中で、この森だけ色が違うんだな」

「100年前までは、

魔女とか化け物がいるような、もっとドロドロした森だったらしいよ。

ミストルテインが搦れるようになって森の色が変わったって」

「へえ」

「アリオンにも変わった森、あるだろ？ 木が赤色の、レッドベルの森」

「……よく知ってるな。あんな辺境の名前を」

「生まれは、そっちだからね」

さりげなく距離を離せば、簡単にはぐれてしまえそうだった。

どこへ行ったところで結局は引き戻されるのだが。

流れる足元の落ち葉を見送っていたイヴは、不意に立ちはだかった背につんのめった。

「わッ……と。何？」

咄嗟に、脇へと身を翻す^{ひるがえ}イヴ。

エイルは道の外れを探るように睨んでいる。
いつそう力をこめて握られた剣の柄が、かちりと鳴った。

「何か」

「え？」

「何か、聞こえないか？」

木々のささめく音がする。

ホワイトノイズのような音が騒ぐだけで、いつこうに風もない、森深く。

揺れる木の葉ひとつにまで気を立てながら、エイルはゆっくりと振り返る。

イヴはしれっと首をかしげた。

「聞こえないよ？」

ふわりとロープを風に遊ばせ、イヴは道に舞い戻る。

まだ怪訝そうな目を貼りつけてくるエイルに、

イヴは悪戯をしかけた子供のように、にやっと笑ってみせる。

「　　鈴みたいな、音なんて」

エイルは呆れたように、大きく溜息をついた。

びよこびよここと、楽しげに小道を跳ねていく黒色テルテルを睨み、

「……………まったく。　　どこが英雄だ」

制帽のつばに手をかけ、すこしだけ目深に引き下げる。

道の先で、落とし穴にはまるさまをわくわくと待つような、邪気はないがタチの悪い笑顔でイヴが待っている。

エイルはぶっきらぼうに、イヴの背を道の先へと押しやった。

「何を企んでる」

「え、俺？ 企んでないよ、見たまえこのいたいけな目を」

「いたいけ？ フーン」

チリン…

三度、耳朶をかすめたその音に、エイルは視線だけをよこす。うっそうと茂る木の上、木の下、道の奥。

一瞬でかけ巡った森の中に、鈴の主は見えなかった。

先を歩くイヴが、エイルを振り仰ぐ。

意外にも、黙っていれば純真そうな紫紺の目を見下ろした後、

エイルはもう一度その小さな肩を、森の先へと押しやるのだった。

t o b e c o n t i n u e d

第四章

鈴の音が聞こえない？（後書き）

本編があまりに暗いので、優しい色の絵を書いて巻き返しをはかろうとするもの大して効果は無いのであった。完。

いや、まだまだ話は始まったばかりです。明るくも暗くもなるでしょう。今は目が据わったり企んだりな二人ですが、お付き合い頂ければこのうえない幸せです。

おとぎ話はまだまだ続きます。

火和良のブログはこちら<http://aria0007.blog61.fc2.com/>

第四章

鈴の音が聞こえない？

どうにも、具合が悪い。

エイルは制帽を直すふりをしながら、親指で眉間のしわを伸ばした。

瑠璃^{るり}の森、サドルはさらに色の深みを増し、

蔦^{つた}と苔をふんだんに着こんだ大木は、森の隙間を埋め尽くすように絡み合っている。

何かの鳴き声はいまや息をひそめ、

しっとり濡れた空気が頬を、首すじを撫でていく。

けもの道に所々、トラップのように飛び出ている根を

爪先でいなしながら先行する黒テル坊主　　イヴは、

無邪気に森林浴をしているようでありながら、

さりげなくエイルに何度か、一瞥をよこした。

その小さな頭を驚つかみ、

エイルは蛇口でも回すようにぐりつと正面にひねる。

「いッ…。いた、もげるよ大尉さん！」

「前を向いて歩け……後ろを見るな、まっすぐに」

「まっすぐ無理だよ。道分かれてるよ」

「右だ」

分かれ道の片方、より蒼深い細道へイヴを押しやり、
エイルはもう一度、制帽を直す。

凜と顔をあげるものの、その反動が軽くふらついた足に、
エイルは片目を眇めた。

「ねえ。大丈夫なの？」

ぬつと、懐に飛び込んできた無垢な顔面を、

エイルは反射的に驚つかむ。

「平気だ」

「イキ、デキナイ」

「まったく……」

イヴを押しつけ、エイルは仏頂面で歩き出した。

具合が悪いなんて、何年ぶりだろう。

腰元に追いつき、

なおも何か言いたげな顔を向けてくるイヴに、

エイルは溜息をついてローブのすそをまくりあげた。

「ワーツ！」

2ヶ月前の野菜を生で食べた時、一升の毒水を飲んだ時、

7日寝なかつた時、銃弾でわりと穴だらけにされた時……

いずれもさほど具合が悪いとは思わなかつたものだが、

大地の引力は、これほど強いものだっただろうか。

気を抜けば倒れ込んでしまいそうだ。

そこらのマンドラゴラでも引っこ抜いたように、

エイルはまくつたイヴのローブを片手に束ね持ち、

表情を引き締めた。

顔を覆われ、千鳥足を踏んでいるイヴを不機嫌に見下ろす。

「虫の居所が悪い。白状しろ」

「何をだよ！」

「私に何をした？」

「知らないよ、だから心配してんだろ」

ふごふごと喚き、

不自由な手の代わりに地団駄をふむマンドラゴラ。

声こそ真摯だが、布の下でどんな顔をしていることか。

エイルは俄に、息をのんだ。

手からするつと、ローブが滑り落ちる。

ローブの中から意外にも、真剣に気遣うような顔を向けてきたイヴを、

エイルは 咄嗟に突き飛ばした。

樹木の壁に背中を叩きつけるイヴ。

エイルは剣を抜きざま、イヴへ間合いをつめる。

その蹴り上げられた土くれを、錆びついた槍が射貫いた。

蒼の鱗粉を撒き散らし、一瞬で霧散する槍。

木にもたれたままのイヴに肉薄する寸前、

エイルは身を翻し、飛来した2本の槍を薙ぎ払う。

よどみなく、木の葉の影さえ動かない辺りを睨み付けながら、

「おい」

「んー？」

のんきに小首をかしげるイヴを、エイルは自分の前に突き出した。

「働け」

「ハア!？」

振り返ったイヴの鼻先を、槍の切っ先がかすめる。

今し方 背を預けていた木から伸びたその刃を、

エイルは流れるように叩き切った。

目を見張るイヴ。

刀身についた蒼の粉を血振りのように軽くはらい、

制帽を目深にかぶり直したエイルは、

そっけなく、しかしわずかに意地の悪い微笑をうかべる。

「……冗談だ」

イヴは一瞬言葉をのんで、くやしそうに吐き捨てた。

「どこが具合悪いんだよ、くそが」

「悪いとも。早く小細工をやめないと、うっかりラインを、」

飛んで来た槍を、無造作に打ち返すエイル。

頬すれすれにかすめた破片を怨みがましい目で見送り、

イヴは肩をすくめて言葉をつなぐ。

「『うっかりラインを、ひねり潰すかもしれないぞ?』」

「ひねり潰そうと思う」

「やめる確信犯。大体どれもコレも俺じゃないって、この槍は

「分かってる。お前の味方ではなさそうだ」

剣を地面に突き刺し、胡散臭そうな目をしながら、
エイルは首もとからミストルテインのネックレスを引き出した。
「お前にも、敵はいるんだな」

森が啼き鳴いた。

剣の柄に手をかけるエイル。

刹那、その頭上の空がひび割れた。

蒼い光のガラスをぶち破り、

薙刀を振りかぶった男が身を躍らせる。

煌めく蒼を見上げ、イヴは自嘲気味に笑った。

「もう敵しか居ないよ」

エイルの肩口に、男の刀が食い込む。

刹那、エイルの姿は霧散した。

蒼の鱗粉をもろにかぶり、男が顔を攣らせる。

イヴは誰にもなく、呟いた。

「な。」

チリン…

男の足が土にめり込んだ時、

その爪先で、目を剥いた男の首が後頭部をしたたかに打ちつけた。
遅れて、屈強な体が膝をつく。

一瞬、呆けるようにだらりと手を垂れ下げ、静止した巨体は、

やがて後ろに倒れることを選んだ。

血を撒き散らし、地面に沈み込んだ男の向こうで、
エイルは剣を 鞘にゆっくりと収めきる。

森は、凧いだ。

残ったのは、新鮮な死体ひとつ。

エイルは蒼白い手の甲で、頬の古傷をなぞった汗をぬぐう。

「怪我は……ないか」

「……ないよ」

エイルは疲れを押し出すように深く、息をついた。
その息にのせるように、かすれた声でつぶやく。

「お前、さつき誰に向かって ……」

かくつと、エイルの右膝がおれる。

なし崩しに膝をついたエイルの懐に、黒いテル坊主が飛び込む。

傾いだ大人の体を肩だけで押し支え、

イヴは無言を言わさぬ気迫で囁いた。

「戻ろう」

「……なんだって？」

「さつき分かれ道があっただろ。 あっち側に、休める場所がある」

「まずくなったら部下を『出す』……森をぬけるくらい、問題ない」

「ミストルテインに『落としてある』部下？」

イヴは、呆れたように溜息をついた。

「まぶしくなつてからじゃ、そんな大技使えないだろ」

エイルは身をよじり、イヴの支えから体を落とした。

今にも瞑つてしまいそうな目をこじ上げてはいるものの、

苦しげに息をするだけで、支える手は体を起こすに至らない。

とろとろとした血がぬらす樹皮を見つめ、イヴはつぶやく。

「肩くらい貸すよ」

二人の前でただ血を垂れ流す、残党の死体。

エイルは複雑な、蒼白の顔を一瞬、思いつめるように歪めた。

「やめろ」

かすれた息を吐き、膝をたてるエイル。

だがやはり 事切れたように 倒れ込んだ。

血の染みた根の絨毯じゅうたんに、なお爪を食い込ませる姿を見下ろして、

イヴは、啼き叫んだ。

「やめてくれよ!」

蒼白な顔を、エイルは軋ませながら空向ける。

蒼と黒のまだらを背に、イヴが今にも、泣き出しそうな顔で叫んでいる。

「なのに、どうしてあんたらは なんだよ!?」

あんた等。

誰と、一緒にされているんだ……？

朦朧とした視界がさらに、水の膜でもはったように霞む。

小さな黒い影が迫り来て、木漏れ日を遮った。

何か怒鳴ってる。

でもうまく聞こえない。

「俺の前で　　に　　混ぜろ　　！」

「……何……？」

死の床の親を、必死につなぎ留めるような顔。

何故この子供は、こんな顔を私に向けるのだろうか。

そもそも、

この子供は、誰だったか。

「　　！」

彼が叫んでいる。

彼の、ローブの首紐がほどけている。

がちりと拘束布で固められた、華奢な体が見える。

エイルは思い通りにならない腕を何とか樹皮から浮かせ、

少年の胸板に手を押し当てた。

可哀想に。

取って、やらなければ。

蒼の光が、花びらのように散った。
腕をとかれ、一瞬呆けるものの、
少年はなおも^{すが}縋るような目をこちらへ向ける。
役目を終えた腕が、落ちる。

「エイル大尉！！」

チリン…

誰かの名前を怒鳴る声。 どこか場違いな、愛らしい鈴の音。

あとは、頬に跳ねた雫の感触だけが、残った。

t o b e c o n t i n u e d

第四章

鈴の音が聞こえない？（後書き）

すげえ…たいへんだね…書き続けるって…！ゼエゼエ

でも読んでくれる方がいるかぎり、書くのです。

お気に召してくださいましたか…？ 少々心配。

ちよつとでもコメントくれると、う、う、うれしいなんて言わない
んだからねッ！ うれしくなんて、なななな（ry

彼らのおとぎ話はまだまだ、続きます。

火和良のHPはこちら<http://aria0007.blog>

61.fc2.com/

ついったはこちら<http://twitter.com/clo>

wn07

第四章

鈴の音が聞こえない？

> i3070 — 498 <

枯れ果てた平野に、雨が降っている。

その中を、線香花火のような紅花を腕いっぱい抱えた少年がひた走っていく。

雨と、怒りに細められた琥珀の目には涙がともっていて、

馬のたてがみのように茂った大地に、しずくを散らしていく。

丘を切り開いた平野である。

眼下には霧にかすんだ町並み、丘の上には雲にかすんだ屋敷がそびえている。

「待て！ 待てって、坊ちゃん！！」

霧の中、落ちた紅花を踏みつぶしながら、軍服を着た大柄な青年が怒鳴る。

一瞬足を止めるだけで塵気楼になる小さな背中に、青年は舌打ちした。

平野のさなかに場違いに立っている石造りのアーチを、

少年が、やがて青年が駆け抜ける。

左右に、回廊の灯火のように整然、延々と、墓石が並んでいる。

少年は、墓道の最後を飾る、まだ真新しい墓の前で足を止めた。肩で息を押しだし、抱き込んでいた腕を、横殴りにふりはらう。朱が舞った。

紅く、香り高い華が、白い墓標に返り血のように飛び散る。

「エイル!!」

追いついた青年が、少年の脇を抱えて宙に引つ張り上げた。

「やめろ、ベンの墓だぞ……!!」

「まだ死んでない!」

少年は嗚咽を絞り出し、必死に身をよじらせた。

「まだベンは息してる! こんな墓、要らないでしょう!?!」

「本人が『混ざる』前に用意したんだ、毒の花なんか投げやがって

……!

なに考えてんだ!?!」

「怨めば良いんです!」

青年の顔が引き攣る。

少年は屈強な磔を引きちぎり、墓標を背に青年を睨めつけた。
ぼたぼたと涙をこぼしながら。

「怨んで、死ぬほど怒って、前みたいに俺を殴りに来れば良い……
!?!」

少年は、怒鳴りながら膝をついた。

散らばった紅花が、雨のしずくに濡れていっそう艶やかに香り立つ。
朱のまだらに顔をうずめて、少年は慟哭する。

「……皆……簡単に忘れないで欲しい……」

膝をついた青年は濡れそぼった栗色の頭に釘付けたまま、やがて力

なく、座り込んだ。

ふるえ啼く少年は、冷えきった両手で青年の膝にすがる。

「クルグス……」

「…ん？」

雨に濡れ、沈んだ制帽のつばを、青年はそつとはじき上げる。少年はいまだ地面に伏せつたまま、かぼそい言葉をよこした。

「俺もいつか、クルグスやロンドのこと、忘れるんですよね」

青年は、灰の降りそうな空を仰いで、つぶやく。

「明日にでもな」

浅黒い頬を、細雨が幾重にもつたう。

少年は、青年の深緑の膝を、しわくちやに握りしめた。

枯れた草の先から、

実ったしずくがぴち、ぴちと、少年の震える手に落ちて流れた。

「感謝を、前払い、出来たらいいのに」

少年の涙声に、青年はびしゃっと栗色の頭を叩いた。

這い上がるように顔をあげた少年を、青年は不機嫌に見下ろす。

「墓立てるよかタチ悪いから。それ」

少年の華奢な腕を軽々と引き、青年は立ち上がる。

泣き腫らした少年の小さな顔に、ぞんざいに制帽をかぶせて、

青年は穏やかに笑った。

「戦争終わったら、ロンドを嫁にもらうんだろ」

制帽からのぞく白い、綺麗な頬が一瞬、息をのんで引き攣った。泣き出しそうにくちびるを噛みしめ、やがて、歯をみせて笑う。

「いつの話ですか。それ」

「お前らが7歳くらいの時。司祭頼まれた」

「覚えてないですよ、そんなこと」

「何ならロンドに聞くか？」

「やめてください」

少年は制帽のつばを押し上げ、すねた顔をのぞかせる。

青年は声をあげて笑い、短く刈り込んだ頭に、取り上げた帽子をぼすりと乗せた。

「こっちは全部覚えてんだよ」

頼もしい、笑顔だった。

そんな、微笑ましい誰かの夢を 見た。

蒼空と、若葉の翠。

うつすらと目蓋をあけたものの、あまりに眩しいその明かりから、エイルは嫌そうに顔を背けた。

ついでに庇もかざそうかと、腕を持ち上げる。

「……………」

左手が動かない。

エイルは重たげに、目を開けた。

鼻先に、大きな赤の目々ふたつ。

興味心身といった様子で、愛らしい目が瞬いている。

桃めいた髪。傷一つない、やわらかそうな紅色の頬。

ネコのように顎のしたに両手を置き、少女がこちらを見つめている。

「なっ……………!?!」

誰だ。どこだ。いつだ。知り合いか？

体を強張らせ、動く方の手で腰元をさぐる。剣がない。

みるみる、さらに大きく見開かれる、少女の目。
やがて。

「おきッたあー!!」

少女はこぼれそうな笑顔で、うさぎのように大きく跳ね上がった。

エイルはただただ呆然と、跳ねていく少女を見送る。

左腕がしびれている。少女が下敷きにしていたのか。

少女は、奥に小さなロッジが見える、自然の広場に駆け込んでいく。

広場の中央に、高い切り株に腰掛けて、本を読んでいるイヴがいる。
切り株の下にようやく足をつけると、少女は背伸びしながら叫んだ。

「起きたのだわ！ おわー、起きた！！」

「へー」

「ねえねえ！ チェシヤ、ちゃんと捜したのだわ！！」

「ほいほい」

頷きながら、イヴはひらりと切り株から飛び降りる。

「えらい？」

「えらいなあ」

「がんばった？」

「がんばったねえ」

イヴのロープを引っ張りながら、少女はこのうえなく嬉しそうにニコーツと笑った。

エイルが身を起こした木の下に、歩み寄る二人。

呆然と見つめる視線に気づいたのか、

イヴは古びた本を肩に担ぎ、そっけなく小首を傾げる。

「俺が誰か、分かる？」

「囚人だな」

「いいよチェシヤ。絶好調だ」

「ぜっこーちよう！！」

嬉しそうに笑って、少女は がっ！と拳を突き出す。少女の首もと、純白の羽根のようなふわふわ服には、鈴のような飾りがついている。

「彼女は？」

エイルはイヴに、剣呑な目をさし向けた。

少女は少しだけ目を丸くして、イヴのロープの後ろに隠れる。

「おこってる」

「この人はいつつも怒ってるんだよー」

「彼女は誰だ？」

イヴと少女は、顔を見合わせた。

イヴが顎でしゃくる。

少女が、千切れそうなくらいブンブンと首を振る。

イヴが少女を前へおす。

少女は口をあぐり開け、1歩下がってイヴのすねを蹴つとばす。

エイルはエスカレーターしつとあるど突きあいを追い払うように、

「どつちでもいい！」

「わかった、チエシヤが言うのだから！」

きつ！ と勇ましく、愛らしいひとさし指をエイルに突きつけた少女は、

一瞬吊り上げた目を、またほにゃー、と和ませる。

ふわふわの白スカートを弾ませながら、少女はまっすぐに手をあげ、宣言した。

「チエシヤっていいいますー！！」

きっかり、10秒後。

エイルは珍しく殺気を露わにして、腕を組んだ。

「でっ」

「ホアツ……!?!」

「ごめん、俺が言う」

「ま、待って! いまのは練習なのだわ」

「ダメだ。残念だけど人生はいつつも本番なんだよ、チエシヤ」

「め、名言……!」

文字通り雷に打たれたように、感動したまま動かなくなる少女
チエシヤ。

イヴは慣れたようにチエシヤを置いて、エイルに向き直る。

「悪いね。こいつ変わってるから。いろいろと」

「……それで?」

エイルは脱力し、溜息をついて木にもたれ掛かった。

イヴは親指でうしろを指しながら、いたずらっぽく笑ってみせる。

「語り部だよ。このサラドールに住んで、

ヴァルシスの歴史の記録係をやってる。

3年目のミストル使いだ」

「チエシヤは真理を知っている」

不意に響く、おとなびた声。

チエシヤが、イヴのローブの裾から顔をのぞかせる。

紅い目をすっと細め、妖艶に笑った少女は、人差し指を自分のこめかみに押し当てた。

「お前の中も、ぜんぶ」

エイルは思わず背伝いに、身を引き上げた。

黒いローブから半分だけ顔を見せている少女に、妙な悪寒が背筋を撫でる。

エイルがただ、少女を凝視していると

くりんと指をおさめ、チエシヤはイヴのローブを握って微笑んだ。

「なあんて、言ってみたいのかわ」

> i 3 0 6 9 | 4 9 8 <

ただ愛らしく、微笑む少女。

ますます殺気を垂れ流すエイルに、

イヴはふうとひとつ、息をつくのだった。

t o b e c o n t i n u e d

第四章

鈴の音が聞こえない？（後書き）

もうほわらのらいふはぜろよ

そろそろ連載一ヶ月ですね。はい。

また変態ができましたね。なんだこれ。変態か。

つづく。（がんばれじょー）

火和良のHPはこちら。（これからはこっちの方が更新早いとおもいます）

<http://aria0007.blog61.fc2.com/>
ついったはこちら

<http://twitter.com/clown07>

第四章

鈴の音が聞こえない？

「……あ」

それは、突然のことだった。

広場にイヴはいない。

少し前、彼はウンコだと言って森の奥へ入っていった。

あと30秒、戻ってこなかったら『落とす』
木陰で体をやすめながら、

エイルがそう決めた矢先のことだった。

『スーパー漢方を煮たミラクル煎茶があるのだわ。きっと体調も良くなるから!』

ロツジから持ってきたツボをかけた、

死ぬ気でいやがるエイルの口に壺ごと突っ込もうとしていたチエシヤが、

唐突に、心臓でも貫かれたかのように固まった。

「……あ」

耳元で流れ出した熱湯の滝を、エイルは光速の勢いではねのける。

「あ?」

いささか恐喝じみて睨んだエイルも
また、息をつめて固まった。

聞こえる。今聞こえた。あの、音。

ちりん…ッ

馬乗りになっていたチエシヤが駆け出すのと、鈴の音は、同時だった。

身をかがめ、白ネコが翠の地を疾走する。

軽々と、広場の中央に立つ高い切り株に飛び上がり、

チエシヤはふわふわの白コートを、舞い上がる風に流した。

すらりとした肢体に、黒のタンクトップ。

白一色に見えたふわふわのスカートは、すその白段のうえに黒十字の柄が入っている。

腰元にひらく蝶々からのびた端は片方だけが長くなっており、それはさながら、黒猫のしっぽのようだった。

「だめよ。ルール違反なのだよ！」

腰に手をあてて、仁王立ちしたチエシヤは、さわめく森相手に顔をしかめた。

「ここはチエシヤのおうち。彼らはチエシヤのお客さん。

それでもほんとにやる気なの？ このどろばー猫！」

エイルは別の意味で痛んだ頭を振り、剣を手にふらりと膝をたてた。

「まだ気狂いがあるのか……？」

「なにしてんの、大尉さん」

「なにつて……、ッ！」

ネコのように首を引つ張られ、エイルは腰を木の根に思いきり打ち付けた。

咳き込むエイルを見下ろし、いつのまにか傍に来たイヴはため息をつく。

ローブの下で組んだ両腕には、深い藍のアームウォーマーをつけていた。

「じつとして。息するだけでもきついんですよ」

「おま、えな……そう思うなら、ゴホッ」

「だから、サラドールはやめた方がいいって言っただろ？」

大尉さんがひとりで片付けてくれるだろうなーってにやにやしてたのに、

このヘタレ野郎が。ここはめんどくさいんだよ、勢力がさ」

「勢、力……？」

のど元をおさえ、なんとか首をもたげたエイルの胸元を、イヴは古びた本で軽く押しおさえた。

あまりに大人びたイヴの表情に一瞬、エイルは目を奪われたが、自分の重石になっているその本に息をのんだ。

ぼろぼろの皮の背表紙。手のひらにおさまるほどの、小さな本。

表紙には、エイル・ウェリテリセという署名と、

ほとんどかすれて読めなくなったDIARYの文字があった。

本を奪い取り、エイルは今度こそ、殺気をむきだしにする。

「おまえ……！！！」

「暗号みたいな日記だね。ほとんど何が何だか、分からなかった」

イヴはからかうでもなく、ただ診断する医者のように淡々とささやく。

「もしかして、大尉さんにももう、分からなかったりするんじゃない？」

立ち上がり、イヴは哀れむように、言葉をおとした。

「ヴァルシスの勢力図だって、

…まあアリオンは皆殺し主義だから軍学校では教えないだろうけど、

だれかに、教わらなかった？」

誰かに。

そこに妙な含みを感じて、エイルはうんざりと日記を突きつける。

「誰にも教わっていない！ 何を読み取ったのか知らないが、

私にそんな面倒見の良い知人はいないし、この日記も理解してる！

余計なお世話だ…！！」

「そうだね。でもその日記、あんまり信用しない方がよいよ。

勢力については、あとで教えてあげる。

あんたは敵って言うより、…何も知らずに闘ってるみたいだから」

イヴは、切り株の上に立つチェシヤを見上げる。

チェシヤは凜として顎を引き、前に向き直る。

イヴはローブをするりとほどいた。

「俺がアリオンで処刑されれば、あんたはそれでいい。

…でもさ、」

見上げるエイルの前で、イヴはその華奢な身をさらした。

ベージュの半袖に、白のフード、迷彩色のズボン。

瑠璃の蒼とも藍とも色を変える、玉虫に似た光沢のウォームアーマー。
！。

手の甲にはチェシャと同じ、黒十字の刻印が入っている。

イヴはローブを腰のベルトにくくりつけると、確信したように言い切る。

「俺をアリオンに連れて行く事自体、本当はもっと考えた方が良い。

このまま誰かの言いなりに進めば、近いうちに後悔するよ」

「……なんだって？」

「ヴァルシスで俺を殺しておけばよかったって、あのお姫様は絶対、泣き叫ぶ」

イヴは酷薄に微笑んだ。

「7日後に処刑台にあがるのが、本当に俺だといいいね」

どういう、意味だ。

そう問う前に、イヴは光の方へと疾走した。

ひらりとイヴが、チェシャの横に降り立つと、あたりの森が不意に

ざわめきを増した。

「大尉さんのカバーは任せたよ。チエシヤ」

チリン…

イヴは、笑っていなかった。

張り詰めた空気のただ中で、森の一点を見下ろしている。

ちりん、ちりん…

チエシヤは一瞬、エイルの居る木陰を振り返ろうとする。彼女の肩に置かれたイヴの手が、それを引き止めた。

「見るな。協力させちやダメだ」

「ちがう、すずのね……」

「聞こえない」

イヴにかかるく押し出され、チエシヤは空に身を落としながら、言った。

「チエシヤには、きこえるよ」

イヴは、森の一点を見つめている。身をひねって、優雅に着地したチエシヤは、今一度 木陰の方を振り返る。

森が啼いた。

無数の青板が、広場を囲む。

ガラスの割れるけたたましい音が、カラスを空に舞い上げた。エイルはなんとか膝をたて、剣をかまえる。広場を、50人の男がとりかこんでいる。蒼の粉を踏みしめ、もっとも頭の軽そうな若者が、イヴに向けて叫んだ。

「おかえりなさいませえ！ ヴアルシスの英雄様ア！」
「ただいま？ 相変わらずバカそうでなによりだよ、バカネコ」
「クソねずみ、アリオンに傷心旅行か？！ 首と心臓は置いていけ」
「黙れよ」

どこか楽しげに笑い、イヴは芝生に降り立った。長い銀の髪をはらって、丸腰のまま、イヴは小首をかしげる。

「できれば、波風なしで森をぬけたいんだけど」
「ダーーーーメーーーー」
「だろうね」

ニヤー、と口を三日月に吊り上げた若者を鼻で笑い、イヴはチエシヤを一瞥した。
うなづくチエシヤ。

ただ状況をはかりかねるエイルだけが、棒立ちしている。

「森をぬけたきや、抜けるまで戦いなア！！」

一斉にイヴへと襲いかかる男たち。
同時に地を蹴ったチエシヤは、
エイルの腹にとびこんで軽々と、肩に担ぎ上げた。

「ちょ……ッ！」

反転する世界。

身をよじるうちにも、翠の深い方へとめまぐるしく世界が変わっていく。

「じつとして!」

「なんで、いつたい…!!」

「森を抜けてから話すのだわ!!」

もう見えなくなった、彼の姿。敵の群勢。

エイルは思うようにならない体に舌打ちし、
ただ足早に流れる世界を、見つめるしか無かった。

t o b e c o n t i n u e d

第四章

鈴の音が聞こえない？（後書き）

誰も読んでくれないのに、書く意味なんてあるのかな。
そんな風に思つて、つまづいてた。

書くよ。書かなきゃ。書きたい場所が いっぱいあるんだ。

火和良のHPはこちら<http://aria0007.blog61.fc2.com/>

（HP限定短編、「天国のリアリスト」を更新中）

ついつたはこちら<http://twitter.com/clown07>

読んでくれて、ありがとう。

第四章

インターロード

幕間 ?

ちりん…

エイルを米俵のごとく担いだまま、川の白岩を飛びつないでいたチエシヤは、
ぴくと耳をふるわせて立ち止まった。

川は浅く、瑠璃の滝つぼに流れ込む水しづきが虹を創っている。

チエシヤはエイルを抱え直し、抜け目なくあたりの森を見渡した。

「おろせ！ あいつを『落とす』……！！！」

「だめ。 そんな顔色悪いひとに落とされちゃ、 たまったもんじゃねえのかわ。

イヴならへいき」

「私も平気だ、自分で歩く！」

「うるせえのかわ！」

エイルを滝に投げ飛ばし、チエシヤはゆらりと川下を振り向く。

3人。

先程まで影もなかった3人の男が、
それぞれ白岩の上でチエシヤを見下ろしている。

白十字。

双子星。

逆三日月。

3人の手の甲にはそれぞれ、別のマークがついていた。

白十字が笑う。

「チエシヤ、アリオンの手伝いか？」

「たまに私好みのことをするなあ、お前は」

「チエシヤはいつもおまえギライなのだわ」

双子星が嘲る。

「中立の記録者が…なぜアリオンの軍人を助ける？」

「とつとと殺せ、イヴも殺せ」

「それは、虐殺者の仕事。中立かんけない」

逆三日月が嘆く。

「イヴなんてどうでもよろしい、とりあえず貴方には仕事があるのですよ。」

「今日の分の歴史を、覚えていただかなくては」

「おまえの手は借りない。捏造がおおくて、二度手間はきらいよ」

そして黒十字のマークを身につけているチエシヤは、

3人の威圧的な男を前に、
微笑んだ。

「ちょうどいいのだわ」

愛らしい腰を振って、

川面にうつぶせ、滝に背を打たれているエイルを振り返る。

ぶくぶくと水面に泡を量産している顔を抱え上げて、

チエシヤは真面目にひとさし指をたてた。

「歴史のベンキょうなのだわ。わたし、プロ」

「は……？ ゴホッ」

「この森はヴァルシスの縮図。」

3つの勢力のしたつぱが、情報収集とナワバリ争いをくり広げてるの」

教えてあげるのだわ。あなたが壊した、国のこと。」

どうしてヴァルシスが、アリオンと戦うことになったのか。なにもかも無くしてあやつり人形になっているあなたに今を整理してあげる。」

「イヴとはここで待ち合わせなのだわ。だから合図があるまで、見てくるといい。」

ヴァルシスのこと、イヴのこと、あなたのこと」

「私の……？」

「あなたの日記。あれは大嘘なのだわ。特に：クルグスさんのあたりが。」

大尉さんが信じるかどうかは、分からないけど」

少しだけ哀しそうな笑顔をつかべたあと、チエシヤは小首をかしげた。

「てらしあわせて、みておいで」

「なんでお前が……そんなことまで。」

敵国の軍人だぞ、もうちよつと敵意を……！」

「チエシヤはすべてに中立。それが義務。だからあなたにも、平等の権利を」

チェシャは不気味にも、淡々とつぶやいた。

「あなたは 自分がトロイの木馬だったことを、分かった方が
良い」

ふわりと、エイルの襟を手放した。

「と、いうわけで！ 一名様ごあんなーい！！」

ゴーツ！と轟音をたてて、エイルの体が川面につずもれる。

「ちょ……！ じぼ j b g k d w h . i . i g g

平等？ トロイの木馬？

日記が、嘘？

いったい、何のことだ？

ゆらぐ水面の上で、チェシャがぱちんとウインクした。

「バイバイ なのだわ」

Interlude インタールド ?

蒼の世界に溺れ、エイルは巡り来る映像の渦に目を走らせる。

ペンデュラムライン。

落としたことは山ほどあるが、落ちたのは久々だった。

ここは、チェシヤのミストルティンが管理する「ライン」なのだろう、

本流から分岐した末端。色が蒼だからそう分かる。

本流はもつとどす黒くて、暗くて、もつとたくさん声がする。

気が狂うほどに。

ヴァルシスの歴史の記録を綴った、ライン。

流れゆく映像のなかで、ひとつの窓が迫ってくる。

狭い牢獄だった。

10歳ほどの身なりのよい少年が、牢屋の前に座り込んでいる。

金髪碧眼、非常に育ちのよさそうなその少年は、あぐらをかいて牢の鉄格子に鼻先をつけていた。

暗く湿った牢に入っているのは、傷だらけで半裸の優男……これは、何だ？

「あなたは、悪い人なの？」

エイルは足が、固い石床につく感触を感じた。

二人はエイルに気付いていない。

これはラインに落ちた「記録」。かつて生きていた人間の記憶だ。

では、誰の？

「悪いかどうかは、テメーが自分で決めればいいんですよ。

特に俺は。思想犯ですし」

優男が、肩をすくめてうそぶいた。

「こんな檻にブチ込まれて、俺は可哀想だと思えます？」
少年は、何度か瞬いたあと、首を振った。

「ぼくには、世界中から 守られてるように見えるよ。 ダルオン
さん」

エイルは、音もなく息をのむ。

ダルオン？

では、まさかこの少年は

優男、ダルオンは肩をくつくつと震わせ、手足の鎖をがちやつかせた。

「じゃあコレを取ってくださいよ。領主のムスコでしょう？

アリオンーの処刑の街、ヴァルシスの次期領主様。

たまには囚人を救ってください」

「いまのぼくに、そんなこと出来ないよ」

「ウーン、でしょうねえ。 はっはっは、ハア」

ダルオンは額を床に打ちつけた。ぐったりとトドのように横たわり、

薄く笑いを浮かべたまま、目だけを暗く淀ませる。

「無念」

そうつぶやいたのは、檻の外の少年だった。

少年は真新しいベストが汚れるのもかまわず、

腹ばいになって、無垢な目を囚人の顔とぴったり、向かい合わせた。

「ねえ。 7年って、長いかな」

「君には、長いでしょうねえ」

「あなたには、7年は短いの？」

「それなりに長いでしょうねえ。生きて、いられたらば？」

「そうなのか」

少年は立ち上がった。

ダルオンは片眉をあげ、犬歯までみえるほどに口のはしを吊り上げた。

「なんです？ 出前でも届けてくれるんですか？

俺はニワトリしか食べませんよ」

「もっとおいしいものあるのに。 卵やきとか」

「美味しいかどうかは、テメーで決めるものです」

「そうなのか」

少年はこくりと頷いた。

ガン！ガン！と、堅固な鉄扉が外側から叩かれる。

「坊っちゃん、そろそろ出ないとまずいッス！

バシたらお父様に殺されます！

俺が！」

「うーん…」

覗き穴からわめき声をよこした、つぶらな瞳から目を逸らし、少年は名残惜しそうに檻の前を一周した。

「坊っちゃん！ ああもう、シャイエ様！！」

「うんうん。 もう行く」

頷いて、少年 シャイエは、牢獄に歩み寄った。

膝をついたシャイエは、口元にちいさな手を寄せて囁く。

「ぼくね。 あなたの本を読んだんだ」

「……へえ？」

ダルオンは、どうでもよさそうに空返事して、ぼりぼりと頬をかいた。

「でも、途中までしか読めなかったんだ」

「フウン」

「取り上げられたんだ。 父様に」

「そりゃあ、そうでしょうねえ。 自分の子が思想犯の本を読んだら、

それだけで親はキチガイになるでしょうよ。

あなたの父はマトモです。 マトモ」

「でもぼくは、全部読みたかったんだ」

ダルオンは居心地が悪そうにがりがり頭を掻く。

「もう売ってないんだ。 図書館にもないんだ」

「そいでなんですか。 俺にどうしろと言うんですかい」

「自分の本、全部覚えてる？」

うんざりと頭を垂れたかと思うと、ダルオンは髪を振り乱して怒鳴った。

「覚えてるに決まってるだろう、クソ野郎がア！！！！！！

そのどーしよもないクソ思想を振りかざしたあまり俺はココにいるんですよ、

なんなら脳内読み上げてやろうか、毎日気が済むまで！？」

「ホント！？」

「おいふざけんな、めんどくせえ！！」

「坊っちゃん！！ 殺されますって、俺が！！」

なんだ。こいつら。

たぶん世にも高名な人物であろう彼らの、ひどく賢明でない会話を、エイルは口を開けて聴き続けた。

シャイエと、ダルオン。

アリオン連合国内の流刑人を入れた牢獄と、処刑台だけが名物だった、

山間に囲まれた「処刑の街」、ヴァルシス。

100年前、そのただ中から独立を叫んだのは、ヴァルシスの領主シャイエと、

流刑に処された元囚人・ダルオンだったという。

『……………シャイエとダルオンの、出会い……？』

映像が霞んでゆく。

蒼の世界に引き戻される。映像が廻りゆく。

幕間は、はじまったばかりなのだわ。

楽しげな少女の声が、聞こえた気がした。

t o b e c o n t i n u e d

第四章

インターロード

幕間？（後書き）

「ここで勢力図をちゃんと明らかにしておこうと思う。え、遅い？
うん。そうなんだ。すまない。」

でもきつとこれを読んだとき「哀れみ」みたいなものを感じたと思
う、

そういう「諦めに似たときめき」みたいなものを（ry
うそです。ほんとにときめいて欲しいです。

インターロードと4章が終わったら、序盤でいちばん書きたいシー
ンが書けます…！うずうず…！

そのためにも、丁寧に行こうと思います。

読んでくれて、ありがとう…！

火和良のHP <http://ariaa0007.blogspot.fc2.com/>

ついた <http://twitter.com/clown>

07

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5078i/>

英雄の伽《とき》

2010年10月15日22時05分発行